

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

飯村

豊橋校区史

16

Imure







豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 飯村



豊橋100祭imure 旧東海道松並木の植樹式典 ～2006年4月14日～
「松を5本植樹しました。毎年植えていって、私たちが大きくなったとき
昔のような松並木が戻ってきてくれるとうれしいなあ」



住宅地としてスタート（1987年）



終戦の頃の松並木
右側2本目が現存する松である

飯村は農業の先達の地
種なし巨峰は飯村で開発





ふるさとまつり

松並木 1 本現存 (2006年)
左ページと同じ場所で撮影



住宅地飯村 (2006年) 左ページの航空写真よりやや南上空から撮影

組合設立10年前



区画整理前（昭和40年）



区画整理後（平成6年）

発刊によせて



平成18年度
豊橋市総代会長

西 義 雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業に素晴らしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思えます。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。



平成18年度
飯村校区総代会長

大 矢 重 弘

昭和45年頃には、飯村も見渡すかぎり田園地帯でしたが、世の中の進歩と共に、飯村土地地区画整理事業により、素晴らしい住宅地域に変貌し、昭和58年には飯村小学校が誕生しました。隣には飯村公園があり、また東部地区市民館飯村分館と並んでおり、教育環境には大変恵まれています。また、その他生活に不可欠な病院、金融、商業施設等も充実しており、戦後には想像もしていなかった豊かな生活ができる地域となりました。しかし、豊かになって、人間として失ったものはないでしょうか。それが少し心配です。

平成17年は、ご承知のように中部国際空港の開港と愛知万博の開催で盛り上がりました。そして、飯村校区内に豊橋医療センターが開院したことは、地域住民にとって大変心強いことでもあります。平成18年は、豊橋市制施行100周年にあたり、飯村校区の地域イベントとして、旧東海道の松並木の植樹、人形劇団「バンビ」の公演等いろいろ実施いたしました。100周年の祭典が、豊橋の発展に寄与できることを願っています。

最後に、校区史にたずさわってくださった方々に心からお礼を申し上げます。

第1章 自然と環境

- 1 位置、土地の様子 …………… 7
 - (1) 飯村校区の位置 …………… 7
 - (2) 気候の特色 …………… 8
 - (3) 自然の様子 …………… 8

第2章 歴史と生活

- 1 ふるさとのあゆみ …………… 13
 - (1) ふるさとの黎明期（縄文～弥生時代）… 13
 - (2) 豪族が暮らしていた飯村（古墳時代）… 14
 - (3) 焼き物の産地であった飯村（古代）… 14
 - (4) 頼朝が闊歩した頃の飯村（中世）… 15
 - (5) 大名行列が行き来した頃の飯村
(近世) …… 16
 - (6) 蚕都豊橋から軍都豊橋へ
(明治～昭和期戦前) …… 19
 - (7) 農村風景から一大住宅地へ
(戦後、平成) …… 21
- 2 ふるさとの産業 …………… 21
 - (1) 農業の地・飯村 …………… 21
 - (2) 豊橋筆の基礎を創った佐野重作 …… 23
 - (3) 交通の発達と産業 …………… 24
 - (4) 窯業の伝統が生き続ける …… 26
 - (5) 住宅地化とともに …………… 27
- 3 区画整理に伴う住宅地化と校区づくり … 27
 - (1) 豊橋の人口増加と住宅地の拡大 …… 27
 - (2) 区画整理と地名変更 …………… 29
 - (3) 人口の増加と学校建設 …………… 29

- (4) 飯村分館の建設と特色ある校区の活動 …… 30

第3章 教育と文化

- 1 教育の充実 …………… 32
 - (1) 豊橋市立飯村小学校 …………… 32
 - (2) 豊橋市立東部中学校 …………… 36
 - (3) 史跡や文化財と信仰 …………… 38
 - (4) ふるさとに伝わる昔話 …………… 42

地図に見る飯村校区の移り変わり1

〈明治32年〉 …… 44

地図に見る飯村校区の移り変わり2

〈大正14年〉 …… 45

地図に見る飯村校区の移り変わり3

〈昭和25年〉 …… 46

地図に見る飯村校区の移り変わり4

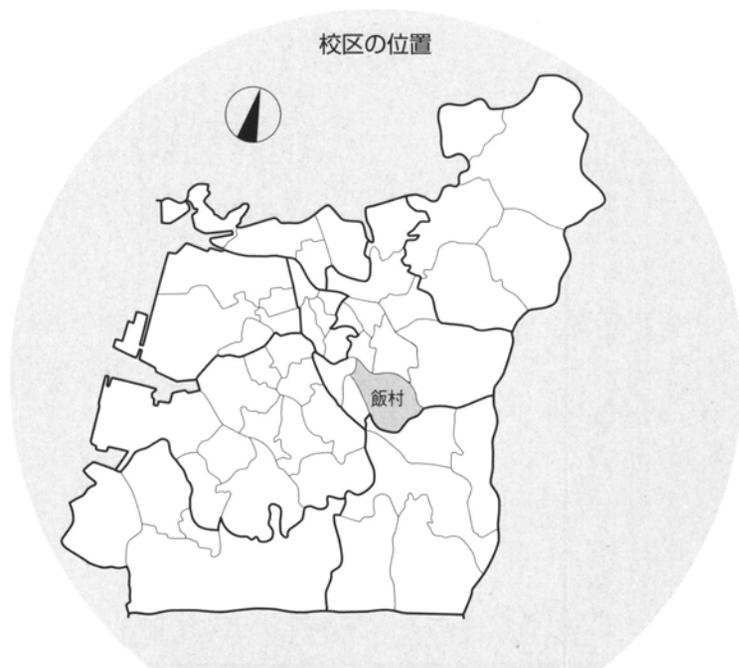
〈平成2年〉 …… 47

年表—私たちのふるさと飯村のあゆみ …… 48

参考文献 …………… 52

編集後記 …………… 52

校区の位置



第1章 自然と環境

1 位置、土地の様子

(1) 飯村校区の位置

校区の位置 飯村校区は豊橋市の東部に位置する。北は多米、岩田、東は谷川、二川、南から西は岩西校区と接している。校区のほぼ中央にある飯村小学校の位置は北緯34度44分41秒、東経137度25分31秒である。校区の総面積はおよそ440.6ha。

土地の成り立ち 校区の東の高山地区や大岩地区は弓張山系の南部となっており、最高点は標高259m（松明峠北側の頂上）である。この山地はおもにチャートが基岩となっている。チャートは深海底に堆積した放散虫などのガラス質の殻を持つ生物の死骸が、長い年月を経て固まったものである。近くの葦毛湿原で採取されたチャートの放散虫による年代測定では、約2億2千万年前に堆積したもののようだ。

豊橋市南東部は中央構造線の外帯に位置している。これらのチャートは南方の太平洋海底に堆積したものが、フィリピン海プレートにのって運ばれ、日本列島に衝突して隆起したものであろう。松明峠近くのピークに立っ



岩屋の断層 右上から左下へと走る

て南北に連なる山並みや渥美半島を眺めると、この山系や渥美半島がフィリピン海プレートの衝突によって形作られたことが推し量られる。大蔵山や岩屋山も同じようにしてつくられたものである。チャートは大変硬い石で、打ち合わせたり金属でたたいたりすると火花が散る。大蔵山の東側の火打坂という地名は、ここで火打石が産出したことに由来するという説がある。

岩屋山の岩屋を観察すると右斜め上から左下に向かって小規模であるが断層が観察できる。この土地が形成されるときに地殻変動のエネルギーの強さがしのばれる。岩屋の岩窟がどのようにしてできたかについて定かな証拠はないが、断層によってもろくなったチャートが海の波に削られた海食洞であったのかもしれない。

地形の特徴と利用 高山地区から大岩地区にかけての弓張山系は植生が豊かで、水源涵養林となっている。高山浄水場は陸軍が大正元年に整備したこの地方最初の近代的水道設備であるが、この施設がここに設置されたのは、十分な水源があったからである。

校区の大部分を占める洪積台地は、標高30m程度で西に向かって緩やかに傾斜しながら広がっている。所々にカオリンを多く含む白色陶土として使える粘土が産出したため、古くは弓張山系の斜面を利用して多くのあな窯が作られ、盛んに窯業が行われていたようだ。また、この台地は古くから畑地、水田として利用されてきた。サツマイモ栽培は伝統がある。種なし巨峰の開発の地としても有名であ

る。校区の北東には県農業総合試験場があり、トマトの水耕栽培をいち早く始めるなど、この地方の園芸農業をリードしてきている。

鎌倉時代から関東と京をつなぐ街道が通っていたが、峠越えの山道であった。江戸時代には弓張山系の南を回り込むように東海道が開かれ、現在も国道1号線や東海道線、新幹線が通っている。交通の要衝としても重要な地域である。

(2) 気候の特色

平成16年(2004)の年平均気温は17.2℃、最高気温は36.8℃、最低気温は-3.5℃であった(二川設置の気象庁アメダスによる)。伊良湖岬にぶつかる黒潮の分流とも言える伊良湖潮流にのって湿った暖かい空気が流れ込みやすく、どちらかといえば最高・最低の幅が狭い穏やかな海洋性の気候になっている。

飯村校区の位置する東海地方は、太平洋側気候に支配され、夏に降水が多く、冬は乾いた北西風が吹く。古くはこの風を三河の空っ風と呼び、芋切り干しや切り干し大根づくりに利用してきた。

気候帯としては暖帯(温帯下部)に属し、冬でも植物の光合成ができる日が多く、常緑照葉樹林が基本植生となる。縄文時代のころはシイやカシのうっそうとした森が土地を覆い、ニホンオオカミやツキノワグマが徘徊していたのかもしれない。そのころの基本植生の様子は、大蔵山の岩屋山側にわずかに残っている。

(3) 自然の様子

弓張山系の植生 校区の東に位置する弓張山系の南部は、植林地の割合が少なく、二次林の雑木林が主である。高山浄水場の東側には水源涵養林としてとりわけ良好な雑木林が残されている。雑木林の構成種はコナラ、アベ

マキ、ツブラジイを中心に、タブ、エノキ、ヤブニッケイ、クロバイ、ヤマザクラなどが混じる。赤岩地域に比べるとヤマザクラの割合は少ない。

弓張山系南部はチャートが基岩で、痩せ地であったために、以前はその多くがアカマツ林におおわれていた。アカマツ林は直接的にはマツノザイセンチュウによるとされる松枯れによって、昭和50年代には急激に衰退した。松林の林床に好んで生える食虫植物のイシモチソウは、以前は高山地区の松林などに普通に見られたが、アカマツの衰退と共に減少し、現在では絶滅危惧種(豊橋では絶滅?)になってしまった。発展する工業と共に悪化した大気汚染も松枯れの副次的な原因であるらしい。今でも弓張山地や大蔵山の所々にアカマツが残っているが、林の遷移も進んで息も絶え絶えである。

アカマツは、林を最初に作る先駆的な植物である。荒れ地ができるとまず一番に侵入し、太陽の光を十分に浴びて林を作っていく。種子は風で散布されるが、一度密生した林ができてしまい日陰になったところに着地しても発芽できない。明るいとこにしか育たないので陽樹と呼ばれる。

昭和初期の頃までは、松林の林床に落ちた枯れ葉や枯れ枝は、重要な燃料資源であった。この地方では松の枝や葉を掻き集めることを「ごをかく」と呼んだようだ。

江戸時代の俳人松尾芭蕉が豊橋来訪の折詠んだ句に「古(ご)を焚いて 手ぬぐいあぶる 寒さ哉」というものもある。

このようにして人の手が入り続けると、林床は明るく保たれ、松の林は世代交代を重ねていくことができる。マツタケなどの副産物も手に入った。けれども、人の管理が加わらなくなると、林は密生した状態になり、林床は暗くなる。アカマツは世代交代ができなく

なり、變わりにシイやタブなど、日陰でも発芽・生長することのできる陰樹が生えてくる。やがて、親のアカマツが枯れると、シイ、タブなどが大きく育ち、400年ほどもたてば極相林を形成する。これがこの地方でのアカマツ林の植生の遷移の概略である。

現在弓張山系に見られる雑木林は、松枯れによって早くアカマツが失われて裸地ができたところに、コナラ、アベマキ、ヤマザクラ、



アベマキ

アラカシなどの陽樹が侵入し、成長してできたまだ若い二次林である。とはいえ、林内にはヤブツバキ、ヒサカキ、シャシャンボなどの暖帯照葉樹林を特徴づける木が中木層や低木層を形作り、自然林の様相を呈している。

現在、大蔵山では、地域の人たちによって里山再生事業が進められており、林に手を入れて健康なアカマツ林を再生する努力がなされている。身近なところでの経済的な価値が失われるに連れて、山や林に対する人々の関心は薄らいできているが、そのような事業によって本来の里山と人との関わりが取り戻されていくことを期待したい。

人との関わりという側面から弓張山地の雑木林を見たとき、元來庭木として持ち込まれた樹種が、林の中はかなり進出してきている。林床に大変多いマンリョウは、ほとんどが葉の縁が著しく波打つ園芸品種である。ヒイラギナンテンやイヌマキ、ピラカンサ(タチバナモドキ)などもしばしば林内に見られるよう

になった。庭木の果実をついばんだヒヨドリなどの野鳥が、種子を運んでくるのであろう。

また、最近の地球温暖化の傾向であろうか、以前はあまり目立たなかったカラスザンショウが、雑木林のあちこちに目につくようになった。

特徴的な植物 この地域に見られる特徴的な植物を列記すると尾根筋や斜面に点在するナガボナツハゼは世界でも渥美半島から弓張山系にかけての地域にしか分布せず、愛知県レッドリストでは絶滅危惧ⅠA(絶滅のおそれが高い)に指定される、大変貴重な植物である。

また、雑木林の林床に点々と見られる、花が小さくピンク色をしたツツジのミカワツツジは、日本を代表する植物分類学者の牧野富太郎によって豊橋の天伯原で見つけられ、名付けられた。花が朱色を帯びないヤマツツジをすべてミカワツツジとする見解もあるが、この地方のものは他の地方のものと葉や花の大きさなどいくつかの相違がある。いまだ分類がはっきりしていない植物である。天伯原では雑木林がほとんど失われてしまい、現在の生育状況は不明となっている。この地域の物はそれに近い産地として大切な物である。

高山霊園の周囲の岩盤にはキガンピが多く生育している。キガンピは、樹皮が和紙の原料としても使われる。西日本から九州・四国に分布する植物で、分布の東限に近い生育地といえる。市内のどこにでも見られるというような植物ではない。

岩屋山のチャートの岩盤には、特徴的な植物が多く生育している。頂上部には土壌がなく痩せ地であるために、樹木があまり生育しない。成長の良くないアベマキやイヌビワなどが岩の裂け目に張り付くように生育している。その中にススキによく似たウンヌケモドキが細々と生育している。環境省の絶滅危惧Ⅱ類に位置づけられる植物である。頂上部に

は外来種のおオキンケイギクがかなり侵入しており、圧迫が心配される。

日の当たる岩盤上には、乾燥に強いシダ植物であるヒトツバが群生している。よく見ると、やや葉が細く、立ち上がるように生えているものがときどき混じる。これは裏面にびっしりと胞子のう群をつけた胞子葉である。岩盤上をよく探すと、淡褐色の鱗片が葉柄にいっぱいついたベニシダの仲間のアツギノヌカイタチシダマガイが生育している。東三河南部では唯一の生育地と思われる。



シモツケヌリトラノオ

また、岩屋の洞の中にはシモツケヌリトラノオが多数生育している。市内では、赤岩公園などにも見られるが、群落として立派なのは岩屋だけである。

弓張山地の動物

ほ乳類 この地域の弓張山地には、大型のほ乳類としてイノシシ、タヌキ、ハクビシン、ノウサギの活動が認められる。稀にニホンザルが見られることもある。群れから離れた雄であろう。イノシシがクズやヤマイモの根を掘って食べるために、ときどき斜面をかなり激しく掘り返してあるのに出会う。

小型のほ乳類としてはアカネズミ、ヒミズ、コウベモグラ、ホンドイタチ、ホンドリス、ムササビの生育が知られている。ホンドリスがアカマツの松ぼっくりを食べると、芯だけが残る独特の形になる。以前は尾根の上の登山道にたくさん見られたが、最近めっきり見なくなった。アカマツが減少したのが原因なのか、ホンドリスが減少したのか、原因は定かではない。

鳥類 弓張山地や大蔵山には、留鳥としてヒヨドリ、キジバト、ハシブトガラス、ハシボソガラス、ホオジロ、ウグイス、カケス、メジロ、カワラヒワ等が見られる。冬には雑木林の葉が落ち、シジュウカラ、コガラ、ヒガラ、ヤマガラ、エナガ、コゲラなどからなるカラ類の混群が観察される。夏にはツバメ、イワツバメなどの定番の夏鳥の他、キビタキ、オオルリ、ホトトギス、トラツグミなどの声も聞かれる。オオルリが大蔵山で営巣しているのが2005年に確認できた。秋には弓張山系は多くの夏鳥の渡りのコースになり、大蔵山山頂の展望台で見ていると、高速で飛ぶアマツバメの姿や、サシバ、ハチクマをはじめとしたタカの渡りも多く観察される。



オオルリの巣

昆虫類 昆虫類は種類が多く、この地域に見られるものを列記しても仕方がない。ここでは、興味を引くものだけを扱うにとどめる。校区を流れる山中川の上流にはゲンジボタルが見られる。飯村校区の中では、夜間に川岸が明るく、ホタルの生育に不向きになってしまっている。

大蔵山や弓張山系には、秋になるとコウヤボウキが多く咲く。この花にアサギマダラが吸蜜にやってくる。アサギマダラは渡りをする蝶として最近注目を集めており、よく観察すると、はねにマークをされた個体が見つかることもある。アサギマダラは、春に南方から北へと渡ってくる。このときは同一個体が北上するだけでなく、行く先々で産卵し、世代交代を重ねて北上していく。アサギマダラの食草となるキジョランは弓張山系にも生育するので、豊橋でも世代交代が起きていると考えられる。秋になると、北の地域で生まれ

た個体が、気温の低下に追われるように一気に南方へと渡る。沖縄地方まで渡った個体も記録されている。

ため池の自然 飯村校区には、多くのため池があった。現在飯村小学校や東部中学校がある場所も、昔はため池であった。ため池が多く作られた背景には農業用水としての必要性とともに、陶土としてのカオリンを含む粘土を採取した後が窪地となり、池を作りやすかったこともあるようだ。これらのため池の多くは、豊川用水の通水とともに農業用水としての利用価値が失われた。公園として整備されたものもいくつかあるが、埋め立てられたものも多い。

これらのため池の周辺には、小湿地が成立することが多く、シラタマホシクサやトウカイコモウセンゴケなどの東海丘陵要素と呼ばれるこの地域独特の植物たちも過去には生育していたようだ。また、池の中にはホソバミズヒキモやトリゲモの仲間などの水中に広げた葉で光合成を行う沈水性の植物たちもみられたようだ。現在では、オオカナダモやホテイアオイなどの外来種が多く見られるようになり、在来の水生植物はヒシ、ヨシ、ガマ程度のものしか見ることができない池が多い。

ため池は、定期的に水を抜いて底のヘドロを乾燥させることで水質が維持される。水の利用がなくなった今、手のかかる管理がされなくなり、底には有機物を多く含んだ泥の層が厚くたまり、富栄養化が進んできている。そのためにアオコの大発生があったり、池の岸は通気性の悪い泥の中でも生育できるガマに覆われたりしてしまう。底近くの水の中ではバクテリアが増殖し、酸素が大変少ない状態になる。これは、池の底に生活するタニシをはじめとする貝類、特にヌマガイなどの大型二枚貝類には大きな影響を与える。

以前、この地域のため池には在来のタナゴ

が、モロコやモツゴ、フナ、コイなどとともに多くみられた。いつの頃からかタイリクバラタナゴが増えだし、在来のタナゴはほとんどみられなくなった。その後、いわゆる外来生物法にも定められた無視できない侵略的な外来種であるブラックバスやブルーギルが、心ない釣り人によって放流されるようになると、在来のフナやコイ、モツゴなども食い荒らされ、その数を激しく減らすようになった。小さなため池の中には、在来種が絶滅してブラックバスやブルーギルだけしか住んでいないところもある。彼らは互いに共食いをすることで、世代を維持している。

このような中で、タナゴ類が激減している原因には、先述の池の富栄養化が特に挙げられる。タナゴの仲間はヌマガイなどの大型二枚貝の中に、卵を産み付ける習性がある。長い産卵管を上手に貝の水管に差し込み、卵を産み付ける。貝に卵を守らせる、すばらしい自然の知恵である。ところが、池の底の水が酸欠状態になって、二枚貝が住めなくなってしまった。タナゴの仲間は産卵場所を奪われて絶滅の危機に陥っている。今残されているため池の手入れが行われ、二枚貝やタナゴ類の生育環境が保たれるように願っている。

唐沢池など、ある程度規模の大きな池は、冬鳥として飛来するカモ類の絶好の休憩地となっている。オナガガモ、ヒドリガモ、キンクロハジロ、ホシハジロなどのカモ類とともにカイツブリやカワウなどが水面に見られる。バンや、アオサギなどのサギ類も岸近くに多い。ヨシ原に隠れる小鳥や原っぱの小動物をねらうのか、豊橋医療センターの屋上に、小型の鷹のチョウゲンボウが止まっているのが、2005年の11月に観察できた。

市街地の自然 飯村校区には国道一号線や東三河環状線など、主要な道路が走っている。国道一号線などは、国内の物流の大動脈とな

っている。頻繁に行き交う人や車によって、多くの帰化植物がもたらされる。国道の中央分離帯では、コンクリートの隙間に、ヘラオオバコやネバリミノツヅリ、ヒメジョオン、オニウシノケグサなどの雑草がたくましく生育している。



タカサゴユリ

環状線には立派な中央分離帯がある。この中央分離帯は中央部のクスノキが植えられている周囲をのぞくと、アスファルト舗装された面上に土が盛られてできている。そのため、根を深く張り、背丈を高くするような植物は生育できない。ある程度乾燥に耐えられ、根を横に広げたり、地下に球根を作って暑いときには休眠したりできる植物が生き残っている。帰化植物のタカサゴユリやニラ、タマスダレなど花のきれいな球根植物がかなり多く見られるのはおもしろい。チガヤやナギナタガヤ、メリケンカルカヤなどが徐々に勢力を広げているが、その中にネジバナが多数花をつけ、通りすぎる車の起こす風に揺れている。

旧東海道には松並木の松が1本、まだ残っている。近年、松並木を復活させようという取り組みも一部始まっているようだ。校区住民のガーデニングに対する関心もかなり高く、街路樹の根元などに美しく園芸植物を植え付けてあるのをしばしば見かける。

市街地の中では、キジバト、ヒヨドリ、ムクドリ、ハシボソガラスなどの都市化指標鳥と呼ばれる鳥たちの姿をよく見かける。キジバトは街路樹の枝にもしばしば巣をかける。下から見ると透けてしまうような粗末な巣だが、材料にハンガーやビニールヒモなどの

「新建材」がよく使われている。

温暖化指標生物

昆虫 地球温暖化の影響を敏感に受けるのも昆虫の特徴である。20年前にはこの地方には見られなかったツマグロヒョウモンやクロコノマチョウが、大蔵山でたくさん観察されるようになった。1970年代に沖縄の石垣島でツマグロヒョウモンを興奮して採集したことを考えると、温暖化の影響は大きいと実感できる。また、カラスアゲハが以前より多く見られるようになったのも、食草のカラスザンショウの増加と関係があるのかもしれない。近年、カラスザンショウを食草とする南方系のアゲハチョウの仲間、ナガサキアゲハもこの付近で見つかるようになった。この地域で見ついているのは後ろばねに尾のないタイプであるが、そのうちに、より南方系の尾のあるタイプも見られるようになるのかもしれない。

植物 植物の中で温暖化の影響を強く受けるのはシダ植物である。胞子が風に乗れば何百kmも離れたところまで届くので、環境が適合すれば容易に分布を広げると考えられる。最近豊橋市内で南方系のシダのイヌケホシダがたくさん見られるようになった。これも1970年代には紀伊半島の南端当たりまで行かないと見られない植物であった。イヌケホシダは南方の原産地でも山中より市街地の回りの石垣の隙間などによく生育する植物である。岩屋山の岩屋の前にイヌケホシダの大きな株が2005年に見ついている。

また、弓張山系の湿り気の多い谷には、ナガバノイタチシダがたくさん見られるようになった。これも以前は紀伊半島まで行かないとなかなかお目にかかれぬ植物であった。

第2章 歴史と生活

1 ふるさとのあゆみ

(1) ふるさとの黎明期（縄文～弥生時代）

豊橋や、この飯村地区にいつ頃から私たちの祖先が生活を始めたのだろうか。

「牛川人骨」が、現存する日本最古の化石人骨として注目されたのは、昭和32年のことである。その後、三ヶ日人骨、浜北人骨が発見され、日本の化石人骨の研究は豊橋と豊橋の周辺の地をおいて考えられないほどである。そんな地域に、郷土飯村は存在する。牛川人骨は獣骨説も出ており、ここで私たちの先祖が、何万年前から豊橋周辺に住んでいたと特定することはできないが、少なくとも縄文時代から祖先がこの地で暮らしていたことは確かである。そんな足跡が飯村校区やその周辺に数多く残っている。

その当時の暮らしを推測する資料の一つとして白石遺跡の石器類に注目してみたい。

白石遺跡は、豊橋市下条東町から石巻本町に広がる縄文後晩期から弥生前期まで栄えた遺跡であり、豊川用水の分水槽設置に伴い、

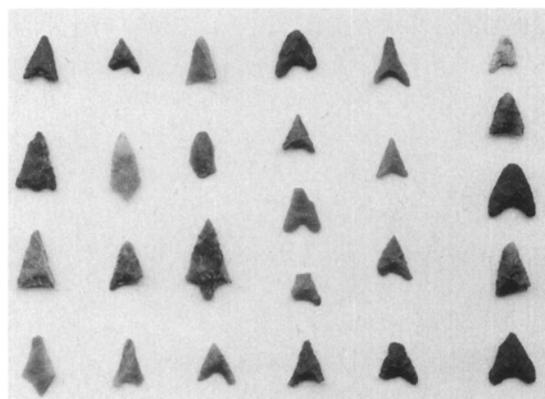
岩石名	%	原石の原産地	原産地比率
サヌカイト	38	大阪奈良県境の二上山	遠隔地で出土した岩石 63%
黒雲母石英安山岩	23	岐阜県下呂市	
黒曜石	2	長野県和田峠	
チャート	29	豊橋市・田原市	東三河で出土した岩石 37%
安山岩	5	南北設楽郡	
流紋岩・松脂岩	3	南北設楽郡	

白石遺跡の石鏃原石産地調査

平成2年に南北9 m、東西7 mという狭い範囲の発掘が行われた。

その結果、環濠集落の可能性を示す堀や、堅穴住居の遺構とともに、多量の縄文時代の石器類が出土した。ここで採取された1,000個あまりの石鏃の岩石名とその産地を分類すると表のようである。今後、範囲を拡大して白石遺跡全体の発掘が進み、この遺跡の全容が解明されるのを待ちたいが、大量の原石が遠方から運ばれてきていたことが分かった。

一方、飯村校区で出土した石鏃26点の岩石名を調べると、チャート21点、黒曜石2点、サヌカイト1点、凝灰岩2点であり、遠方から持ち込まれたと考えられる原石は2点で、あとは飯村の裏山の弓張山地から出土したチャートが活用されていたと思われる。



飯村地内で採取された石鏃

石鏃は狩りの成否を決める貴重品であるが、消耗品でもある。より細工のしやすく、しかも道具としての材質に優れたサヌカイトや黒雲母石英安山岩（通称下呂石）、黒曜石などの岩石をはるか関西地方や飛騨、信州地方にまで求め、行き来していた縄文の世、豊橋に

住んでいた先人は生活に必要なものがあれば、遙か遠方まで徒歩で出かけ、物資をやりとりしていたことが想像できる。道路や橋も粗末なものしかなく、大型肉食獣の生息する時代、夜をどのように過ごし旅を続けたのかを思うとき、縄文の先人に拍手を贈りたい。

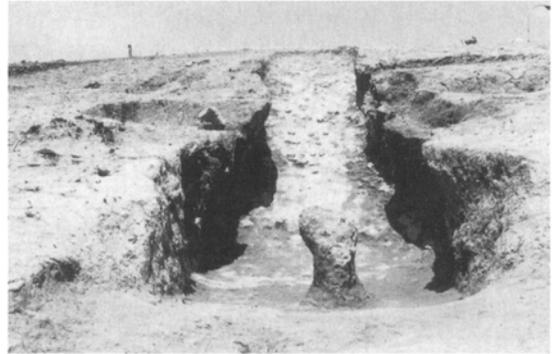
(2) 豪族が暮らしていた飯村（古墳時代）

古墳時代後期の西暦6、7世紀になると、一部の強大な権力者のみが造ってきた古墳は、地方にも広まりをみせ、ここ豊橋でもムラの有力者の累代の小古墳が丘陵の上や裾野に重なるように造られた。その大きさは直径10から20メートル前後の円墳で構成された群集墳である。

飯村地内では、17基の古墳が確認されており、その主なものは山裾の群集墳であるが、飯村北一丁目で大正11年に発見された飯村王塚は平地にあった円墳で、石室内から太刀や玉飾りなどの出土物が発見された。ここで発見



飯村・二川周辺の古墳(●)・古窯(▲)・その他の遺跡(■)



昭和56年に発見された岩屋下古窯

された太刀は環頭太刀といい、実用的な太刀ではなく、大和朝廷が地方豪族に中央集権力を強めようとするねらいのもとで、下賜されたものである。このように考えると有力な豪族の墓であった可能性が強く、飯村王塚といわれている。飯村の地が有力な豪族が暮らす豊かな地域であったことを記憶にとどめたい。

なお、ここからの出土物は、東京国立博物館で保管されている。

(3) 焼き物の産地であった飯村（古代）

東大寺再建の屋根瓦が渥美半島で焼かれたことは多くの人知っていることである。1180年（治承4）の源平の合戦の際、東大寺は焼き討ちに合い、再建の瓦は渥美と備前岡山で焼かれていた。渥美で生産された枚数は約5万枚、350tもの量になったといわれている。

渥美半島が800年もの昔、日本の中で一大焼き物の産地であったわけだが、飯村やその周辺でも、焼き物は焼かれていたのだろうか。

山の裾野を調べていくと数々の古窯を発見することができ、その周辺の灰捨て場などから壊れた焼き物が現在も出土する。豊橋東部地域の古窯は地図の場所で確認されている。

窯名	窯の分布地域	窯数	焼き物の種類	生産時期
湖西窯	浜名湖西岸～細谷、二川	約370基	須恵器	5世紀後半～9世紀前半
二川窯	二川、藤並、高田、飯村、岩崎	約80基	灰釉陶器、緑釉陶器、須恵器	9世紀前半～11世紀
渥美窯	豊橋南部地域～渥美半島	約380基	中世陶器（行基焼）	12世紀～13世紀

郷土の古代古窯

平安時代以前の古窯を古代古窯といい、それ以後発展した中世古窯と区別されている。

ふるさとの古代古窯の変遷を調べると表のようである。

中世六古窯といわれる信楽、備前、丹波、越前、瀬戸、常滑や、美濃の古窯は13世紀以降発展し、現在も営々と生産を続けているが、渥美半島から浜名湖西岸に至る古代古窯は表に示した時代で生産を停止している。どのような理由で途絶えたか定かではないが、二川窯（飯村の古窯も二川窯に分類される）で生産された灰釉陶器の概要と流通範囲を探ってみたい。



二川窯苗場遺跡から出土した灰釉陶器

灰釉陶器は8世紀まで焼かれていた須恵器と比べると、高温で焼かれた灰釉を施釉することを前提とした壺や皿、碗類で、須恵器に使われた粘土とは異なり、高温に耐えうる白っぽいカオリンを多く含んだ粘土を使って焼かれている。

豊橋医療センターの建築現場から白っぽい粘土が出土している。私たちの住む豊橋東部地域は地下に粘土層があり、古代には日本の一大焼き物生産地として繁栄し、ここで焼かれた灰釉陶器は静岡県から関東地方までの広い範囲で発見されている。中世古窯は今も生産を続けているが、私たちのふるさとは中世六古窯が生産を開始する以前の焼き物の産地

として名をはせた地域であることを覚えておいて欲しいものである。なお、明治以降、瓦産業が集中する地として、焼き物の里の伝統が復活し、現在に至っている。

ところで、古窯以外の飯村における古代の歴史を語る資料は現存しない。しかし、普門寺が725年に、赤岩寺が726年に行基の手によって開祖し、多くの人々が行き来していたことは想像できるが、人々の暮らしを明らかにするほどのしっかりとした記録は現存していない。

(4) 頼朝が闊歩した頃の飯村（中世）

岩崎地区には鞍掛神社や葦毛などの地名が残り、源頼朝が行き来していたことが記録されている。隣接する飯村にも頼朝をはじめとする武将たちが駆け回っていたことが推測できる。

定かなことは分からないが、飯村町史には、中世の歴史が伝説として残されている。その一つ、頼朝伝説を以下に書き示すが、確固たる根拠がある話ではない。

昔、源頼朝、戦に利あらず。夕方頃、二川方面より山に追い上げられる。その時、味方の家来たちは四散した。家来を呼び戻すために高山でのろしを上げた。それでここに、たいまつ峠と名がついた。敵もさるもので、山に上がって攻撃をしてきた。それで頼朝は山から降り、飯村中島の東の小さい丘で一戦を交えた。この時、敵は後退した。その土地は、戦勝塚と名づけられた。敵が後退した後、頼朝は吉祥寺に逃げ込み、寺を焼き払い、米櫃を持って逃げ、丸山のふもとに大きな岩があり、岩陰にて朝食を食べたので当地を飯（イムシ）という。今もこの岩を櫃岩という。頼朝はそれから山の低いところを越えて逃げた。そこを、乗越路という。それよりまた逃げたが、頼朝

の愛馬羣毛（あしげ）が足に怪我をした。それで馬から降り、いたわった。そこからこの地を羣毛という。それから逃げ、駒止めの桜のところで馬を非常にいたわったが、馬は死んでしまい、鞍は鞍掛神社に奉つてある。

飯村本郷に建つ吉祥寺は天正2年（1574）開山と寺伝に記されており、頼朝伝説中の吉祥寺とは異なる。また、米櫃の飯が地名『いむれ』の起源と説明しているが、明治10年（1877）頃、当時の村長長坂浅治郎氏が執筆した飯村履歴調査の記述による頼朝伝説には、「鎧櫃ヲ置キタルニ依リテ櫃岩ト言」と書かれており、「米櫃」ではなく、「鎧櫃」と考えると、「飯」村の起源が不確かなものになる。「衣の里」説などもあり、地名起源は定かになってはいない。

応仁の乱後、東三河においても群雄割拠の時代を迎えるが、船形山の合戦（明応8年1499）を始め、いくつもの戦が戸田氏・牧野氏らや、その背後にいた今川氏、織田氏・徳川氏によって繰りひろげられるが、飯村はこの時期になってもほとんどが原野の状態であったようだ。

(5) 大名行列が行き来した頃の飯村（近世）

東海道と飯村について記述する前に、古代からの東海道の発展にまずは触れてみたい。

三河の地は古くは万葉の時代から交通の要衝として人々が往来したところである。奈良時代の東海道は、奈良から常陸の国までの国府を経由する道であり、尾張の国府・稲沢、三河の国府・豊川、遠江の国府・磐田を経て関東へと行くものであり、渡津（小坂井）の駅には駅馬、伝馬、渡船が用意されていた。

奈良・平安時代の歌集には、宮路山や志賀須賀の渡し、高師山などの地名が詠み込まれ、

旅人が通った道筋が読み取れる。奈良から平安にかけての往来は、

- ①（→西三河→御津→御油→白鳥→本坂→）
- ②（→藤川→御油→小坂井→城海津→）
- ③（→伊勢→三河湾→御津→）
- ④（→伊勢→伊良湖→太平洋岸→）

などのルートがあったようで、③、④は伊勢との間は海路であり、702年の持統天皇行幸の際は③のルートを採用しており、当時より御津は海上輸送の船着き場として栄えていた。昔、「津」は港を意味し、「御」がつけられた港町御津の歴史には興味深いものがある。

鎌倉に幕府が開かれると、各地と鎌倉を結ぶ道が整備された。鎌倉街道と呼ばれるが、豊川・豊橋のどこを通過していたかは、諸説は数多くあるが定かではない。中山峠、本坂峠、多米峠、普門寺峠、二川などを抜けるルートが考えられるが、飯村を経由していたという説もある。

室町時代は、三河地方は今川氏の勢力下にあったが、16世紀に入ると織田氏が急速に力をつけ、三河にその勢力を及ぼし始め、戸田氏、牧野氏をはじめ今川、織田、松平など各勢力がぶつかり合い、今橋城をめぐる戦いも繰りひろげられた。そのような16世紀半ば、市内飽海町にいた磯部忠右衛門の入植によって飯村の歴史がスタートする。飯村の先人たちが農業に汗を流すころ、全国制覇をめざし大群を移動させる必要に迫られた織田信長をはじめとする戦国大名は、一方で道の整備にも力を注いだ。慶長6年（1601）徳川家康は、江戸・京都間に宿駅制度を制定すると同時に、伝馬制度を確立した。以後徳川幕府は、街道に松並木と一里塚を設置、参勤交代の行列や旅人の便を図るようにした。

江戸時代に入って貨幣経済が発達し、各地の特産物が江戸や大坂に集まるようになると陸路、海路の交通は頻繁になり、京都と江戸

を結ぶ東海道は街道の要として一層重要な位置を占めるようになる。

東海道が通り抜ける飯村の歩みを、東海道の発展とともに見つめてみたい。

街道としての機能を維持するために幕府は道中奉行をおき、宿場や問屋場、街道維持などのすべての業務を統括させた。

宿場町である吉田や二川には、本陣や、脇本陣、旅籠や木賃宿、問屋場などがおかれ、街道を往来する大名や町民、荷物の運搬・通信業務、助郷や掃除依頼などの維持管理に当たっていた。

一方、宿場間には、松並木や一里塚、立場等が設けられ、旅人の往来を支えていた。吉田・二川間（一里20町＝約6.1km）に位置する飯村においては、火打坂から松並木が連なり、字二軒茶屋に立場茶屋、字茶屋に大名接待用の茶堂があり、殿田橋には一里塚が設けられ、飯村の人々は松並木の維持管理、町並みの掃除、助郷、御林・災害人足など数々の夫役が課せられていた。

「宿人馬御定之事」には、東海道には百匹百人、中山道には五十匹五十人、日光・奥州街道には二十五匹二十五人と触れられており、二川宿は常時、馬百匹、人足百人を常備しなければならなかった。この人馬の使用は幕府から発行される伝馬朱印状でもって使用できるが、幕府の公用旅行者、参勤交代の大名、そして一般の旅行者の順に使用ができ、幕府公用旅行者や大名は御定賃銭で使用でき、大名にあっては石高に応じて一日に使用できる人馬の数は決められていて、それ以上の使用にあたっては相対賃銭（割増料金）が必要となっていた。一般旅行者には相対賃銭が適用されていたようで3割程度割増であったようである。御定賃銭は通常よりもかなり安く設定されていたため、町人や百姓には高い賃銭を要求し穴埋めをしていたようである。

ところで、大名の参勤時期は、外様大名は4月、譜代大名は6月か8月と規定されていて、稲作の大切な時期により多くの人馬が求められ、東海道の交通量は増える一方で、常備されている宿場の人馬だけでまかなうことは困難となり、元禄の頃から宿場近隣の村々より応援の人馬がかり出されるようになり、これらの村々を助郷と呼び、村高百石に馬2匹人足2人が割り当てられた。享保の頃になると元禄の頃の10倍も助郷が必要となり、一層農村を苦しめることとなり、農民が農業に専念できない状況も生まれ、たびたび助郷制度の手直しが行われた。

飯村は二川宿の助郷となっており、他に25ヶ村が助郷指定されていた。飯村の助郷高は311石であり、飯村には馬6匹、人足6人が割り当てられていた。しかし、「二川宿助郷帳」によると、享保10年（1725）には馬10匹、人足10人に増加されており、助郷の割り当てが多くなるに従って、「此上モナキ無理非法ト云フベシ」と問屋と対立したり、助郷役減免願を道中奉行に出したりした。天明4年（1784）、二川宿助郷村は道中奉行に訴えを起こしている。「割り当ての人馬を出さないから、より多くの人馬を請求している」という二川宿に対し、助郷村は、「必要以上の人馬を請求するので出せなくなってしまふ」と訴えて



松並木（昭和40年代後半 三本木）

おり、宿場は常備の人馬を隠しておいて助郷に押しついたり、重い荷物は助郷にまわしたりするなどがあり、宿場から要請があっても理由を作って出かけないなどがたびたびあったようである。全国で離村や一揆までおこり、農村を極限状態まで追い込んだ宿駅制度は、明治5年に新政府の手で廃止された。

ところで、街道は公家や大名などの往来も頻繁であり、常に清掃に心がけねばならなかった。江戸時代は細かなきまりが事細かく作られ人々を拘束した時代で、街道の清掃や松並木の維持管理も各村々に、東海道掃除丁場役という出役が割り当てられていた。公用旅行者などの重要な通行に際して街道の掃除や整地を行ったり、道普請、松並木の保護、補植などを行った。街道近在の宿場や村々が、道中奉行より区間（丁場）を限って指定され、区間の境には、丁場杭が打たれ、担当の村が分かるように整備されていた。19世紀半ばに書かれた「東海道宿村大概帳」には、飯村から瓦町までの2,149間の街道区間に56ヶ村が割り当てられており、遠くは表浜や豊川の村々にも割り当てられ、割り当ての短い村では3間、平均40間（約70m）が割り当てられていた。飯村は、村内約1,200間の並木距離のうち、174間を担当していた。

ところで、各村々は遠方から農作業をおいて出役にはせ参じていたのだろうか。牟呂史によると、牟呂村は吉田宿から御油宿までの間の105間（約190m）が割り当てられており、文政5年（1822）の記録では、75間の丁場役を金1両2朱で下五井村の万六に請け負わせていたことが分かっている。年貢米による物納経済が基本の江戸時代、農村においても貨幣経済が浸透し、助郷や御林人足などにおいてもお金で請け負わせることなどが頻繁に行われていた。

一方で、街道筋の農家は、明和8年270万人、

宝永5年362万人、文政13年486万人もの人々がお伊勢参りをするようになると、耕作の合間に営業する作間茶屋や、畑の作物を客に提供する炒豆茶屋などを宿場の町並みを避けて開いたり、宿場間に立場茶屋を設けたりして、貨幣経済の中でたくましく生活を切り開いたりしていた。街道から外れたこの地域の農村部では、栽培が禁止されている綿や、菜種、たばこなどの商品作物の栽培にも手を出し、農家の中にも貧富の差が開いていった。

それでも多くの農家は日の出から日の入りまで耕作に励み、夜は縄やむしろを編んで生活をし、寛政8年（1796）には、飯村で年貢が払えない困窮農家が9軒もあり、吉田藩から救米を受けていた。

東海道筋殿田橋には一里塚が設けられていた。市内の東海道には他に東細谷一里山、二川、下地の4カ所に設置されており、慶長9年（1604）、徳川家康が秀忠に造るよう命じ、日本橋を基点に各街道の両側一里（約3.9km）ごとに目印となる木を植え、里程の目安、木陰による休息の場となるよう設置させた。多くが5間四方の小高い塚にエノキを植えたところが多かった。市内上記箇所植えられた木は、細谷と飯村が松、二川と下地がエノキであった。この塚の管理も掃除丁場役が当たった。

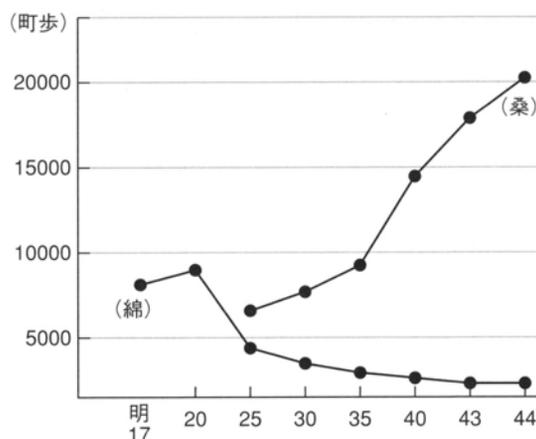
昭和40年代には、飯村の旧街道筋には100本以上の松が緑陰を落としていたが、松食い虫などの被害で、その多くが枯死し、現在は1本しか残っていない。松並木を昭和の時代まで維持してきた東三河の村人の綿々と続けてきた努力に敬意を表すとともに、平成18年4月、飯村の人々の手で新たに植樹された松が緑陰を落とし、多くの市民が徒歩や自転車で行き交う時がまたくることを切望する。

(6) 蚕都豊橋から軍都豊橋へ(明治～昭和期戦前)

明治時代の飯村の様子は、明治35年(1902)に刊行され豊岡村是を見るとうかがい知ることができる。「渥美郡豊岡村として岩田、岩崎、飯村、三ノ輪、瓦町、東田の6大字より豊岡村は成り立っており、交通の便は南部に東海道があり、北部は岩崎往来のみで村内の耕作道は農車を通せず不便なり」とある。また、「本村民は一般に米麦を常食とする。上等の者は主に米飯を喫するが、中等の者は米麦を混用し、下等の者は多くは麦飯を喫し、秋季には甘藷を副食する。維新前にありては、ヒエ、アワ類を常食としたけれども近年にいたりてはこれらのものを常食する」、「養蚕の普及とあいまって、蚕室は居室を兼用するをもって構造を改良し、衛生面に適するは昔日の比にあらざ」とある。江戸時代、飯村はヒエ、アワを食していた寒村だが、副業として養蚕をはじめの中で、現金収入を得て、生活が徐々に豊かになり始めた。

このように養蚕業は飯村を豊かにさせただけでなく、豊橋全体に画期的な変化をもたらした。

封建制度が崩れ、失業した武士階級の授産政策として養蚕業が新政府や県からも推奨され、桑の作付け面積はグラフのように増えてきた。豊橋においては、細谷地区や二川地区で養蚕業や製糸業が、朝倉仁右衛門や前田伝



県下の桑・綿の作付け面積の推移

次郎、小淵志ち氏らの先達の手で、明治10年頃より盛んになり始めた。その後、交通の利便性と工業用水の十分な確保のため、豊橋駅や二川駅周辺に大きな製糸工場が造られるようになった。明治30年頃になると飯村のほとんどの農家が養蚕をはじめた。この頃、子どもたちは小学校を卒業すると、男子は工場へ行ったり、奉公に出たりしていた。また女子は製糸工場で働いたり、女中にいたりした。製糸工場で働いた人に聞くと、朝5時から夜8時まで住み込みで働き、狭い部屋に8人も暮らし、月2日しかない休みにはうちに帰って眠るのが楽しみだったとのことである。

製糸産業の発展を、豊橋の全工業生産額に占める割合で見よう。

明治35年(1902)	31.8%
大正元年(1912)	57.0%
大正8年(1919)	82.2%

この割合を見るだけでも「蚕都豊橋」に値するものだが、大正末期の豊橋の人口が約7万人であったが、そのうち女子労働者、いわゆる女工さんが1万7千人もいたことも驚く数字である。

養蚕業発展の要因を考えると、生育に適した土質や気候、さらに豊富で勤勉な労働力があつたことが考えられる。

このように豊橋は「蚕都豊橋」として発展してきたが、明治40年(1907)より世界恐慌が起こり、その後も不況が続き、恐慌脱出が大きな課題となってくる。

ところで、明治政府は殖産興業政策と富国強兵政策で国力を充実させようとし、明治18年(1885)、名古屋鎮台指揮下に歩兵第18聯隊を豊橋に設置させた。約1700名余の兵員を要する18聯隊が配置され、吉田城跡に兵舎や練兵場を設けるとともに、吉田藩の牛川洋式射撃訓練場を整備継続使用することとなった。

聯隊の設置で、町には電灯がとまり、銀行や商社商店が新設され、学校や町並みも少しずつ整備されていった。

ところで、日露戦争までの常備兵力は、13個師団であったが、この戦力で日清・日露戦争を勝利させてきた。しかし、日露戦争では勝利したものの、講和条約は不本意な調印をせざるを得ない結果であった。それは、戦争を継続する国力、戦力がなかったためであり、時の西園寺公望内閣は4個師団の増設をきめ、その一つが東海道筋に配備されることになった。

恐慌の中であえいでいた豊橋の経済界は、零細な養蚕業を中心とする工業だけでは今後大きな発展はないと考え、大口喜六市長を先頭に、沼津、浜松、岐阜の3市を相手に誘致合戦を展開し、師団設置に成功した。その最大の要因は、豊橋は高師・天伯原に広がる2,300ha(町歩)の演習地を提供できるという点にあった。誘致が決定すると、牛川の射撃場の拡張、高師村、向山、高山の田畑や荒地は瞬く間に軍用地として整備されていった。また、幹線道路の拡張や新設、豊橋駅の拡張工事が行われ、軍都豊橋に向けて都市基盤の整備が進められた。15師団の置かれた富本町の現愛知大学までの新道には様々な商店が並び、客であふれた。また、兵員や軍馬が出す糞尿は、「鎮台肥」として農家に大いに歓迎された。当時の豊橋市の人口は、4万2千人程であったが、1万人以上の軍隊の駐留は豊橋の様々な面に計り知れない影響を及ぼした。

しかし、「軍都豊橋」は、飯村においては、一部の軍施設が設置されたものの、消費人口の拡大や、人馬糞などによる農業の振興には寄与したようだが、総じて大きなメリットはなかった。

明治大正期に飯村に設置された軍施設は、高山射撃場とその背後に整備された給水場である。高師天伯原で激しい訓練が行われたが、

一方で、高山まで行軍し実弾射撃訓練が行われた。本冊子には地図が載せてあるが、15師団の設置前後の地図を見ると、射撃場や高師天伯原に向かう一直線の道が何本も新たに造られていることが分かる。飯村においては、現在は南池上公園になっているところに南西から北東(射撃場方向)に通る道が造られた。区画整理で一部は失われたが、縦横に整備された飯村南五丁目の道に斜めに交差する道が残っており、15師団や高師町北原(岩西小から福祉施設群)にあった第二予備士官学校から、毎日多くの兵隊が行き来した道がこれである。この陸軍射撃場は、現在陸上自衛隊の射撃場として使用されており、天候の悪い日には、より大きく銃器の発射音が町中に響きわたり、戦争経験者には、耳を覆いたくなる音である。

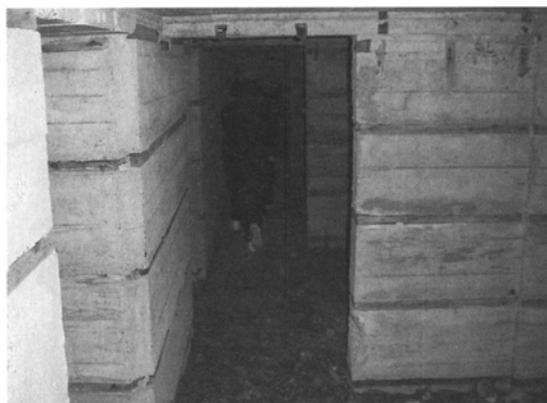
慶応元年(1865)に造られた高山池というため池を、大正元年(1912)、数倍の大きさに拡張して、師団1万人用の上水道水源地が造られた。ここから南栄方面に水道管が布設されたが、現在は豊橋市水道局高山配水池となり、小鷹野浄水場で作られた水道水がここを經由し、南栄方面に送られている。

日本の大陸侵出は、第二次世界大戦へと発展し、世界を敵として戦うことになった。空母艦隊が壊滅し、沖縄戦で市民を巻き込み玉砕が続く中、いよいよ本土決戦が現実のものとなり、アメリカ軍の本土上陸地に、渥美から浜松にかけての砂浜の海岸線が想定された。

そこで昭和19年7月、アメリカ軍の本土侵攻に備え、第73師団、通称怒部隊が編成され、知多半島から駿河湾までの海岸線に約1万5千人の兵力が投入され、本土決戦の準備が始まった。そして20年4月、決号作戦要綱が発令され、第13方面軍隷下に、第73師団、第54軍(颯)、独立戦車第8旅団ほか複数の部隊が配備された。豊川、御津、豊橋、新城、三

ヶ日、藤枝等に配備され、アメリカ軍の上陸に備えた。

海岸線にはもちろん、海岸線から10km離れた二川から飯村地区（二川高地）にかけても各種軍事施設が作られた。砲兵隊1,100人余の将兵と900匹弱の軍馬、各種火砲が配備され、高山水源地区南の山中に戦闘指揮所が造られた。そして、陣地間に塹壕が無数に掘り巡らされ



高山山中に残る戦闘指揮所

ていた。岩屋観音下には重機関銃座や大蔵山北側には3カ所に24糎（cm）榴弾砲陣地が作られ、葦毛には戦車用燃料が地下に蓄えられた。飯村地域は上陸し侵攻してきたアメリカ軍を食い止める重要拠点になっており、戦争が昭和20年後半から21年まで続いた場合、沖繩戦に見るような住民を巻き込んだ悲惨な戦場になっていただろう。

考えの違いを相手の命を武力で奪って押し通そうとする考えが、21世紀に入ってもまかり通っている。郷土に残る戦争遺跡を風化させず、保存することをとおし、二度と過ちを犯さないことを願う。

(7) 農村風景から一大住宅地へ（戦後、平成）

明治期以降の行政区画の変更は9回ほどあり、統廃合による町村名の変更などが行われてきた。しかし飯村地区は農村風景をとどめ大きな変化もなく、未開発地域のまま来た。そんな飯村地区が大きく変貌を開始するのは

昭和40年代になってからのことである。

新全総計画の中で東三河総合開発計画が具体化した。昭和32年の都市計画事業10カ年計画は、38年の東三河工業整備特別地域指定、翌39年の三河湾重要港湾指定へとつながり東三河総合開発第2次マスタープランへと発展していく。この計画によると、臨海部に工業用地造成・港湾整備等をすすめていくのに対し、東部及び南部の丘陵地域には文教・住宅地域として整備していく構想となっており、「工業は水辺に下り、住宅は丘を上る」といわれた。この時すでに現在の景観の原型がほぼできあがった。

昭和43年より岩田第3区画の区画整理事業が、翌44年には多米地域の区画整理事業がスタートした。飯村校区では昭和51年に区画整理事業がスタートし、それまで細々と農業を続ける寒村であったが、一気に住宅地区へと様変わりし始める。

2 ふるさとの産業

(1) 農業の地・飯村

飯村に人々が移り住んで、田畑を耕し始めたのは室町時代の後期の天文9年（1540）のことである。市内飽海町の磯部忠右衛門は吉田城主に田畑の開墾を願い出て、天文9年11月に鎌下御許可を得たといわれている。以後永禄2年（1559）までの20年間にわたり開発が進められ、飯村の地に初めて部落ができた。この場所は、本郷の吉祥寺（天正2年1574年創立）の東のあたりであった。飯村地区はこの本郷が一番早く拓け、茶屋、二軒茶屋、中島、西山がその後、拓けていったようである。

磯部忠右衛門は田畑の開拓と合わせ、水の確保に大変な努力を払った。1564年までに唐沢池、山ノ神池、白ヶ池、清晨寺池、座頭池などを築造し、農業の基盤を作っていった。

磯部氏は江戸時代になっても飯村で農業を続け、本家も、分家も繁栄していく。

江戸時代、吉田藩下では、新田開発が盛んにおこなわれたが、飯村では、新田開発ができる土地が少なかったので、山林の開発に精を出した。その当時、飯村地区では米、麦、粟、きび、ひえ、そば、甘藷（さつま芋）、なす、冬瓜、らっきょう、えごまなどがつくられていた。

吉田藩は年貢の5公5民をおこなったが、農民の暮らしは決して楽ではなかった。年貢で追い立てられただけでなく、助郷や、御林人足、道普請、川普請、災害人足などにかり出されたりした。「生かさぬように、殺さぬように」の政策のもとで困窮を極め、吉田藩でも農民の強訴が度々起こっていた。

明治時代になっても飯村地区は、農業の地であったことに変わりない。

明治12年の飯村では、60町5反の耕地で米241石、大麦70.6石、小麦22石、粟9.5石、きび1.5石、ひえ4石、そば4.5石、大豆6.5石、小豆1.2石、大根1500貫、甘藷90貫、芋50貫、木綿200反ほどの収穫を上げていた。そのころの生活を調べると、全村男女ともに農耕に専念するとともに、農耕の時間外に男は挽き車、女は機織に励んだとあり、460余名の村民の多くが農業に関わって生活していた。

明治以降の農業を語るとき、「蚕都豊橋」をおいて語れない。

江戸幕府の倒壊によって武士階級は仕事を失い、その生計のために明治政府も県も養蚕業を奨励した。豊橋においても有望な産業がないことや、桑の生育に適した土質であったこともあり、積極的な取り組みがなされ、明治10年、細谷の朝倉仁右衛門を中心に養蚕組合が結成され、製糸工場が増えるに従い、明治20年代後半には飯村においても農家の現金収入源として養蚕が大きな位置を占めるよう

になった。

西山地区は江戸時代、御料林であったが、明治維新後官有地となり、明治9年に個人に払い下げられた。田はわずかで、ほとんどが畑や山林ということで、地租の負担にも苦労する時代であり、その所有にも積極的な要求はなかったようだ。明治40年頃、神野新田の三郷に住んでいた武田角三郎、早川平太郎、伊藤熊次郎氏ら3名は、官有地の払い下げを願い出て開墾が始まった。昭和初期には農業も軌道に乗り、昭和15年頃には南瓜生産組合で共同出荷に努め、「西山南瓜」は市場で名をはせるようになった。

大正から昭和にかけては、不況やそれに引き続く戦時経済体制化で食糧増産が緊急の課題であった。

磯部家の分家である磯部弥衛門の4代目が磯部幸一郎氏である（5代目平氏、6代目泰宏氏）。明治30年10月29日に勇蔵氏の長男として誕生した幸一郎氏は、昭和12年、甘藷（吉田種）の増産多収穫をめざし、増産多収穫コンクールで全国第1位となり、翌13年にも連続して第1位となり、人々から芋神様と呼ばれた。そして、戦時色が濃くなるなか、食糧増産が求められる世相の中で、NHKラジオで甘藷の作り方を全国に解説した。

現在も「サツマイモは飯村」と語られる基礎はこの時につくられた。また戦後、『いむれ芋音頭』が作られた。

- | | |
|---|--|
| 1 | 御芋よいもの
塩もたまりも砂糖もいら
ず
水で蒸すだけ おいしいものよ |
| 2 | 味で名を売るいむれの芋は
万人好む食べ物よ |
| 3 | 食糧難の終戦時は
国民餓死をすくいし物よ |
| 4 | まして便秘のその時は
医者も勧める食べ物よ |

幸一郎氏は、サツマイモ以外にも、柿やブドウ（巨峰）栽培などの研究にも力を注ぎ、飯村農業の礎を築いた。

飯村には、幸一郎氏の他に甘藷栽培の研究及び日本各地に栽培法の普及に努めた小澤豊氏を忘れることができない。豊氏は20年余の研究と努力により、甘藷の多収穫に成功し、高松宮厚生事業部にも認められ、昭和8年6月1日、表彰の恩命に接した人であった。

一方、ブドウ栽培では武田治三郎氏を始めとする先達の努力を忘れてはならない。一時期、養蚕で活況を呈していたが、昭和20年頃には斜陽化してくる。昭和4年武田治三郎氏は、桑から柿に転作するが、その後ミカン栽培を経由し、昭和24年デラウエア栽培に取り組んだ。これがこの地のブドウ栽培の始まりとなった。昭和27年には巨峰を植え付け、飯村町を中心にブドウ栽培が盛んな地となった。治三郎氏は以後栽培技術の研究に励み、32年には種なし巨峰の開発に成功し、その技術を広めた。そして、飯村はブドウ栽培技術の先達の地として注目され、武田治三郎氏は愛知県巨峰会の会長として県下の中心的役割を果たしてきた。



戦後間もない飯村（日本画家石川華香氏の水彩画）
殿田池（現在の飯村小学校地点）より本郷・西山方面を望む

飯村の農業の歴史は、農業に不向きな赤土の酸性土壌を相手に適地適作に努め、工夫と血のにじむような努力を積み重ねてきた歴史

である。

昭和30年代になると、静かな農村風景が広がる飯村の地は大きく変わり始める。高度経済成長、農作物の輸入自由化、農作物需要の西洋化などの大きなうねりの中で、機械化、多角化が求められ、専業農家として自立していくことが難しくなるとともに、住宅地化が進む中で、他地域への転出や他業種への転換、廃業などが進んできている。しかし、磯部家や武田家、小澤家のように農業の地の伝統を守り専業農家として精力的に農業経営に取り組む方が平成18年時点で9軒もいることを郷土の誇りとし、忘れないようにしたい。

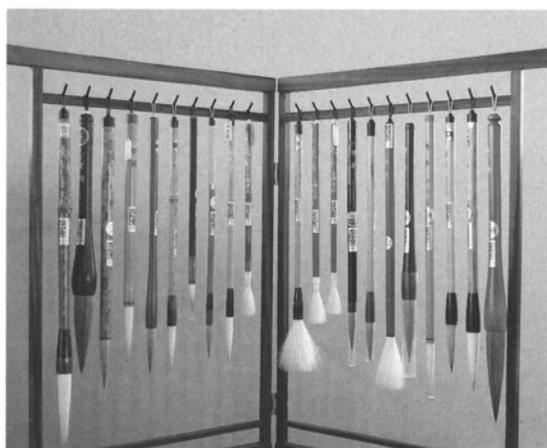
（2）豊橋筆の基礎を創った佐野重作

豊橋方面から東海道に進むと殿田川を渡る。道路右側の殿田橋脇に佐野重作の家が建っていた。現在は新しい家が建ち、当時の面影を残すものは残っていない。

重作は百姓清九郎の次男として嘉永5年（1852）9月にこの家で誕生した。根は正直な重作だが、短気で負けず嫌い、しかも一旦言い出したことは引込めようとしないところがあり、そのため両親から勘当されてしまった。しかたなく吉田藩の農兵として仕官したが、廃藩置県に伴い仕事を失い、またもとの農民にもどったが、元伊勢神宮の神官であった芳賀次郎吉翁より筆づくりの勧めがあり、弟子入りすることとなった。当時の豊橋筆業界は、3、4人の職人しかいない、ふるわない産業であった。14年間翁のもとで技術を習得し、明治11年神明町に独立開業した。開業後も研究工夫を重ね、長さ、かたさの異なる毛を混ぜ合わせる「練りませ」という技法に改良を加えていった。当時、関屋の百花園に住んでいた画家渡辺小華にその製品の質の高さが評価され、東京から大阪、京都、奈良、広島と遠方にまで重作の名声はとどろくよう

になった。

需要は日に日に増加し、徒弟を養成する必要に迫られてきた。最初の弟子は、弟の佐野権作、三井鉄太郎、米津市太郎氏らで、後年、豊橋の毛筆会の発展に尽くした人々である。弟子の数が増えるにしたがって、生産過剰となり、販路拡大に苦しんだようである。けれど明治21年（1888）、東海道線の開通に伴い、東京をはじめ全国に良質の筆として広まっていった。さらに、明治33年（1900）、小学校令の改正で習字が国語の授業で開始されると、毛筆の需要は急激に高まった。



伝統的工芸品に認定「豊橋筆」

明治30年代にはのれん分けした徒弟を含め同業者は数百人になり、重作は明治35年、豊橋毛筆製造組合を設立し、その顧問を務めた。組合では、検査員を巡回させ、品質向上を図ったほか、調査研究や原料の共同購入を進め、現在の基盤を確立させた。

日本一の豊橋筆の誕生のうらには、弓張山地をはじめとする郷土の豊かな自然と、飯村出身の優れた人物がいたことを忘れないようにしたい。

(3) 交通の発達と産業

東海道は、古くは国府間を結ぶ道として律令時代には整備されてはいたものの、江戸と京都を結ぶ重要な街道として発達したのは、

大名の参勤交代制度が定められてからのことである。そして貨幣制度が発達するにともない、物資や人の往来が陸路、海路ともに盛んになっていった。元禄の頃になると、貨幣経済のもとで町民が力を持つようになり、町民文化が栄えるようになった。それに伴い、伊勢詣でがブームとなり、名所名産を示した浮世絵や『一目玉鉾』などの旅行ハンドブック的な本が飛ぶように売れたという。伊勢詣でがブームとなった文政13年（1830年）には、年間486万人、全国人口の6分の1が伊勢に押しかけたという。1日あたりの最高の人出は14万人で、現在の東京ディズニーランドに匹敵する賑わいであった。「伊勢に行きたい 伊勢路がみたい せめて一生に 一度でも」の伊勢音頭を歌い、多くの町民が伊勢詣でに出かけ、東海道を往来した。

このように東海道の往来が増えるに従い、新田開発に入植した磯部家をはじめとする人人も農業だけでなく、東海道との関わりを持って生活する人も出てきた。茶屋や二軒茶屋の字名に当時の繁栄を思い起こすことができる。



江戸時代の茶屋風景（猿ヶ馬場）

二川宿をたち、吉田宿へ向かってみよう。火打坂を登り、信州庵大岩店から大蔵山沿いに東山集会所横を通り、真っ直ぐ吉田宿をめざし松並木を進むと、大岩町と飯村町の境目に達する。左手におれると岩屋病院に進むが、その辻に、「従是西吉田領」の石柱が立って



二軒茶屋から三本木方面を望む

いた。登り道を1kmにわたって歩いてきた旅人は、汗をぬぐいながらやっと吉田領に入ったかと思いつつ進んでいくと、道幅が広がった字東川の先にお茶屋ののれんが見えてくる。道沿いに2軒の茶屋があり、旅人の渴いたのを潤していた。2軒の茶屋があったので今も二軒茶屋の字名として語り継がれている。その茶屋は小澤、加藤両家の先祖が営んでいて、小澤家は今も同じ場所でうどん屋を営み、その玄関にはヤマモモの古木が青々と葉を広げている。樹齢350年以上の古木と聞く。『三河国名所図絵』には飯村茶屋が饅頭とそば切りを名物にしているとの記述があり、強飯に「黒豆を入れ、形を三角にして食べさせている。味は大変よい」と強飯も飯村の名物であったようで、『西杖日記』に「飯村名物、白強飯がある」とあり、強飯（餅米を蒸したもの）

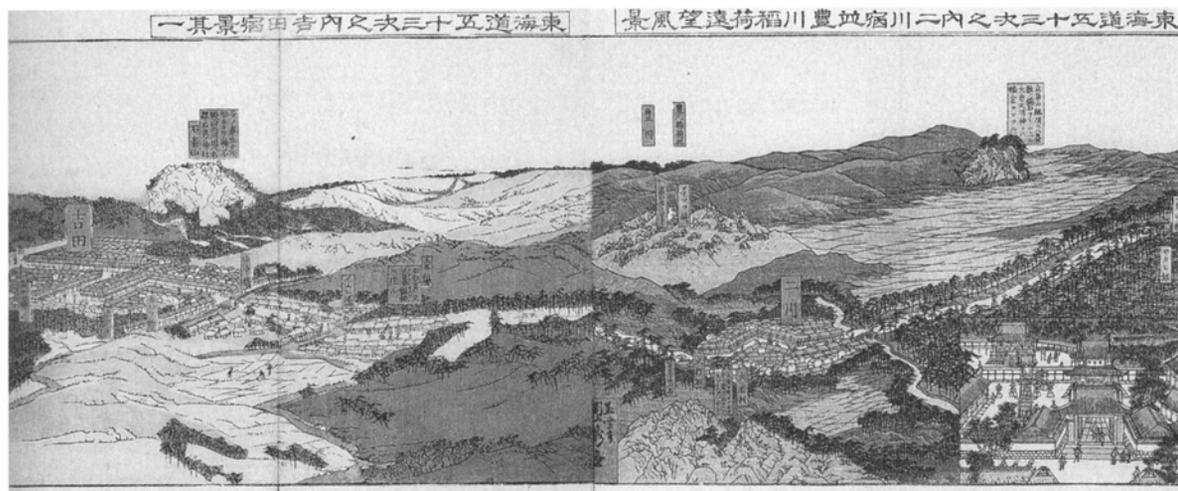
も名物として、東海道を往来した旅人の空腹をいやしてくれていた。

二軒茶屋を吉田宿に向かって出発すると、遠く一里離れた所からも分かるほどの三本の松の大木があった。このことから三本木の字名が残った。さらに進むと、字土橋を過ぎ、茶屋に入る。街道左側に参勤交代で往来する諸侯に茶を立てた茶堂があった。この茶堂は、智光院前の近藤勝司宅あたりにあったものと思われる。この茶堂は、伊勢から来た山田という方が茶屋守を務め、江戸初期から幕末まで、吉田藩から米2俵を受け、参勤交代の諸侯に茶を立て続けた。

東海道はこの先、飯村橋を渡り現在の国道一号線を吉田宿へとつながる。飯村橋を渡ったところには一里塚があったが、今はその名残に標柱が立っている。

この東海道は、明治初期の天皇御東上の際、火打坂東の山側から出水があり、これを避けるため交通慰霊塔側へ新道を造る。渥美郡史によると1878年（明治11年）のことである。なお東海道線は1889年全線開通し、これ以後、人馬による移送が鉄道化されていく。

それまで東西の交通の要となっていた東海道は、昭和30年代の本格的な自動車時代の到来で大きく変貌していく。荷車、牛馬車、人



東海道五十三次吉田宿・二川宿風景

力車などが主な輸送手段であったが、自動車の通行のため、拡幅の必要に迫られ、拡幅案、新国道北側新設案、南側新設案が論議されたが、まだ延々と松並木の続く街道筋の拡幅はできず、南側の畑地の中に15m幅で新設されることになった。昭和31年工事が着手され、33年に完成し、旧道・新道が併走する現在の原型が完成した。新道の完成により昭和28年には半日で947台の自動車通行があったが、その後、鰻登りに増加し、昭和46年には22,720台と2万台を超え、日本一の大動脈となった。しかし、この頃から慢性的な渋滞が起きることが多くなってきた。

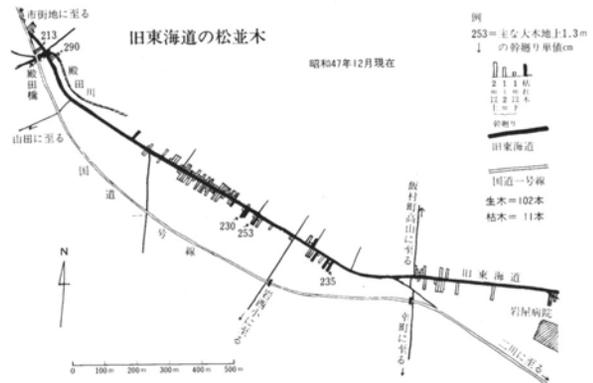
それとともに沿線の生活環境は悪化し、騒音、排気ガス、振動などの道路公害は深刻化し、住宅の移転とともに、道路沿線指向型店舗といわれるガソリンスタンドや自動車販売・修理業、運送業、飲食店などの進出が目立つようになってきた。

年度	乗用自動車類	貨物自動車類	年度	乗用自動車類	貨物自動車類
S28	286	661	55	10,002	11,787
33	994	1,665	58	9,132	12,711
37	2,659	6,364	60	11,505	13,153
40	3,311	10,881	63	11,512	14,110
43	5,214	14,698	H2	11,593	14,792
46	8,164	14,556	6	12,029	12,418
49	9,106	11,328	9	13,285	13,517
52	9,011	11,260	11	12,551	11,056

国道一号線の交通センサス調査（台）

※上下線を含む12時間あたりの通行量を示す
 ※数値は、58年までは三ノ輪調査点、60年以後変更に伴い比較的近い東新町調査点のもの

ところで、トラックによる輸送が一段と増し、現在の国道一号線を始めとする交通網だけでは処理できなくなっており、新たな幹線道路の建設が求められ、国道一号線の渋滞緩和のため、汐見坂より小島、天伯、大清水、大崎、前芝を経て名古屋に至る名豊国道が建設されつつあり、昭和44年に開通した東



昭和47年飯村松並木植栽図

名高速道路に対しては第二東名の建設が進んできている。豊橋の市街地を通過する交通大動脈を郊外に移設することが完成すれば、現国道一号線は近距離移動の主要道路としての役割が増し、道路公害の解消がすすむことが期待される。旧道は歩行者や軽車両の専用道路化が進み、ほとんど姿を消した松並木を復元させることも可能となり、緑陰のなかを歩き来する風景の再現を果たすことも可能となる。

(4) 窯業の伝統が生き続ける

豊橋の東部から南部地域、そして渥美半島に関しては古くから窯業が発達し、東大寺修復の瓦を焼いたことは広く知られたことである。焼き物の産地が瀬戸や常滑方面に移っていった後も、その伝統は生き続けた。寛文3年(1663)、瓦町で瓦が初めて焼かれ、今も地名として残っている。ここで焼かれるようにな



戦後達磨窯で瓦を焼いていた伊藤鬼瓦店

ったのは、吉田の町に近く、良質の粘土や薪が近くで供給される地であったことによる。しかし、町民の家屋には瓦が用いられることはまれで、需要も少なく細々と続く産業であった。町の広がりとともに瓦町の瓦産業は次第に廃れ、豊橋の周辺部へと移転していった。

明治初期には市内に15軒ほどあった瓦製造所は飯村町に4軒、三ノ輪町に3軒、岩屋町に2軒存在した。他には石巻に3軒、向山町、野依町、若松町に各1軒であったことから瓦製造の中心地域であったことが分かる。その後、昭和にはいると、西山地区や三ノ輪地区は、一大瓦製造団地として発展していった。この地に瓦製造所が多くあったのは良質な粘土となる山土、田土、畑土が採掘でき、周辺の山から赤松を始めとする薪の供給があるとともに、交通の便がよかったことによる。

現在も製造を続けている事業所は、(株)伊藤鬼瓦だけである。この会社の先々代は明治40年代に旅をしつつ技術の習得に励み、たまたま立ち寄った豊橋が瓦づくりの適地であることを学び、昭和7年、碧南から優良な粘土を求め移り住み、翌々年の昭和9年、伊藤鬼瓦店を開いた。この会社は、現在まで優秀な手作りの技術を伝承することによって腕の立つ職人を輩出し、平成13年度には「とよはしの匠」の賞を受けている。粘土の採掘や後継者



手作業で創られる鬼瓦と「とよはしの匠」

問題、住居の洋風化などに伴い瓦業界も苦境に追い込まれているが、優秀な技術で今も郷土で製造を続ける事業所があることを誇りに思いたい。

瓦とともに煉瓦製造が飯村で行われていたことも忘れることはできない。全国でも数少ない煉瓦製造所の中で国道一号線沿いで(有)坂本煉瓦工場は最近まで操業していた。奈良時代から続く焼き物の技術は、近代的な煉瓦製造の中にも生き続けてきた。坂本煉瓦工場では月間30万丁をコンピュータを利用したトンネル窯で製造してきた。平成9年廃業後、その跡地は国道一号線を往来する自動車運転者むけにタイヤを始めとする部品販売店となっている。

(5) 住宅地化とともに

面々と農業の地として歴史を積み重ねてきた飯村の地も、昭和40年代に始まる区画整理によって豊橋東部の一大住宅地として変貌していく。幹線道路沿いには、道路沿線指向型店舗が増える一方、内部の住宅地には各種店舗が増え、住みよい環境となりつつある。また、豊橋医療センターをはじめとする各種医療機関も多く、また高齢者施設も充実しつつある。公園は区画整理時に12箇所作られ、他地域がうらやむほどの充実ぶりである。

3 区画整理に伴う住宅地化と校区づくり

(1) 豊橋の人口増加と住宅地の拡大

飯村校区を含む豊橋東部地区の戦後の大きな変化は二つある。一つは自動車時代の到来と国道一号線の拡幅であり、もう一つは東三河総合開発計画に従い、東部及び南部の丘陵地帯が、文教・住宅適地として整備されることとなったことである。ともに昭和30年代の高度経済成長の幕開け期のことである。

前述の総合開発計画を受けて作成された豊

橋市のマスタープランは、「工業は水辺に下り、住宅は丘に上る」と謳い、臨海部への工業用地造成、港湾整備などを含む工業化計画案を示し、東部及び南部の丘陵地域に対しては文教住宅地化の計画を示した。

市の東部地域については、すでに昭和34年、大蔵山に展望台や休憩所が設置され、市民にとって格好の憩いの場となっていた。また、産業基盤の充実を目指し、昭和41年（1966）には多米峠有料道路が完成する。43年には昭和初期より農家から要望の強かった豊川用水がやっと全面通水となる。さらに、昭和42年には市民文化会館が完成し、45年には動物園が大岩町に移転、48年には視聴覚教育センターが岩屋山麓に完成する。こうして東部地域発展の基礎となる諸施設が次第に整えられてきた。

岩田、飯村、佐藤、多米、岩崎を包含する豊岡地区は、昭和40年代に入っても昔ながらのどかな緑濃い農村の姿を保ってきたが、新たな郊外住宅地の造成を目的として、土地区画整理事業が、昭和43年岩田第1、44年多米、45年岩田第2、48年平川本町と順次着手され始めた。それに引き続き昭和51年6月に認可を受けた飯村土地区画整理事業が、飯村土地整理組合の手によって、計画・施行された。



区画整理記念碑

その発足の動機や事情については、飯村の熊野神社に建てられた記念碑「飯村土地区画整理事業の完成にあたって」に詳しく述べられている。

飯村土地区画整理事業の完成にあたって

この地は、豊橋市の東部にあって旧東海道に隣接し、弓張山系を望む静かな農村地帯であった。

昭和39年、東三河地方が工業整備特別地域に、更に三河港が重要港湾に指定され、これを契機に内陸部、臨海部ともに急速な地域開発の気運が盛り上がり、市中心部より押し寄せる市街化の波は足下まで及び、スプロール化を未然に防ぐため、計画的な開発により健全な街づくりを考える時期ではないかとの声が住民の間より高まってきたのであります。

そこで昭和44年6月、飯村土地区画整理事業研究委員会が発足し、土地区画整理事業の啓発推進に努め、昭和46年5月、土地区画整理組合設立準備委員会を発足させ、同年10月には、市に対し技術援助の申請を行い事業に対する取組を本格化し、昭和51年6月14日、愛知県知事より待望の設立認可を得たのであります。

爾来19年間の長きに亘り、総事業費として、1,027,080万円を投じ、組合員も1,255名に達し、施行区域としては、飯村町字弥六、字南弥六、字北殿田、字中殿田、字南殿田のそれぞれ全部と、字西山、字本郷、字浜道上、字寺前、字高山、字中島、字北池上、字南池上、字東川、字三本木及び字茶屋の一部、施行面積1,206,901.30㎡と定め、事業に着手し、鋭意これが完成のために邁進し、所期の目的を達することができたのであります。

これもひとえに役員、総代、組合員各位の一致団結と県、市及び関係各位の適切なご指導ご支援の賜と厚くお礼申し上げます。

歳月の流れとともに、かつての静かな田園地帯であったこの地も緑豊かな自然環境を整えた新興住宅地として変貌への道を辿っております。

最後に、私達が精魂を傾けて造ったこの土地が、私達の故郷として永久に栄えん事を祈念すると共に、事業半ばで世界された関係各位に事業完成を報告し、ご冥福をお祈り申し上げます。

(2) 区画整理と地名変更

区画整理前に使われてきた地名番地は明治22年施行の登記法によって確定したようである。区画整理前の古い地番では飯村の字名は16あり、明治初期から平成6年3月25日まで使われてきた。旧地番と現在の地番の対照表は下記のようなのである。また、区画整理前と整理後の航空写真は冒頭に載せてあるので、参考にさせていただきたい。

新 町 名	旧 町 字 名
飯村北一丁目	飯村町字西山、弥六、南弥六、茶屋、南殿田
飯村北二丁目	飯村町字西山、弥六、南弥六、北殿田、中殿田、南殿田、本郷
飯村北三丁目	飯村町字西山、北殿田、中殿田、寺前、本郷
飯村北四丁目	飯村町字高山、寺前、本郷
飯村北五丁目	飯村町字高山、寺前、本郷、浜道上
飯村南一丁目	飯村町字茶屋、弥六、南弥六、南殿田、三本木
飯村南二丁目	飯村町字中殿田、南弥六、三本木、寺前、中島、東川
飯村南三丁目	飯村町字中殿田、寺前、高山、中島
飯村南四丁目	飯村町字中島、南殿田、東川、北池上、南池上
飯村南五丁目	飯村町字中島、北池上、南池上



飯村大字図

(3) 人口の増加と学校建設

年 数	世帯数	人数	備 考
1858年 (安政5)	96	420前後	飯村のみ
1871年 (明治4)	96	不明	同上
1876年 (明治9)	106	467	同上
1932年 (昭和7)	171	888	同上
1951年 (昭和26)	253	1,302	同上
1960年 (昭和35)	259	1,260	同上
1970年 (昭和45)	539	2,309	同上
1975年 (昭和50)	616	2,549	同上 区画整理前
1980年 (昭和55)	1,395	5,727	区画整理後 飯村1,2区、 岩屋、東山
1985年 (昭和60)	1,803	7,019	同上
1990年 (平成2)	2,642	9,239	同上
1995年 (平成7)	3,101	10,504	同上
2000年 (平成12)	3,702	11,755	同上
2005年 (平成17)	4,598	12,246	同上

飯村校区は、江戸時代から明治・大正までは500人にも満たない寒村であったが、区画整理に伴い一大住宅地となり、人口も急激に増加してくる。

昭和25年、岩田小学校岩西分校が設置され、翌26年正式に岩西小学校が開校した。それまでは、明治6年に開校した岩田小学校に通学していたが、岩西小学校の開校を機に岩西小へ通学するようになる。区画整理が進み、人口が急激に増加してきた昭和58年、岩西小学校から分離独立し飯村小学校、飯村校区が誕生した。

飯村小学校誕生を機に、それまで二川小学校に通っていた東山地区が飯村校区に編入することとなり、この時を境に、飯村校区は飯村一区、二区、岩屋、東山の4町となった。

昭和25年、生徒数579名でスタートした豊岡中学校も、昭和56年には1,855名のマンモス校となり、昭和57年東部中学校が分離独立した。豊岡中学校は、さらに昭和62年には生徒数1,733名となり、昭和63年に東陽中学校が分

離独立した。急激な住宅地化により、旧豊岡村地域の中学校はわずかな期間に2つの新設校ができた。

校区内を見ると、現在も農地を多く見かけるが、遊休農地となっている所も多く、今後更に人口が増えることが予想され、現在でも市内で大規模校となっている飯村小学校、東部中学校両校ともに児童生徒数が増えることが予想され、適正規模の学校となることが望まれている。

(4) 飯村分館の建設と特色ある校区の活動 東部地区市民館飯村分館の建設

飯村校区や隣接校区には、東部地区市民館や校区市民館、飯村地区体育館などの市の公共施設が設置され充実しているが、幼児からお年寄りまでが楽しく集い、生涯学習の場として豊かな生活が送られるように願い、飯村区画整理記念館を建設し、豊橋市に寄贈した。現在、東部地区市民館飯村分館という名称で広く利用されている。大集会室や3つもある実習室など多様な活動に対応できる市内で一番規模の大きな市民館となっている。利用者は校区市民館が近くにあるにもかかわらず、平成17年度には前年度に引き続き7万人以上を記録し、市内市民館の中で一番利用者の多い施設となっている。定例的に利用する自主グループは65を数え、そのうち27グループが運動・健康に関するグループである。



スポーツ教室風景 一分館にて一

初日の出を見る会

飯村校区誕生の頃から続く行事として『初日の出を見る会』がある。大蔵山の頂上で新年のあいさつを交わし、1年のスタートを清々しい気持ちでむかえようと飯村校区青少年健全育成会の呼びかけで行われる行事だ。まだ明けぬ登山道を多くの校区民があいさつを交わしながら集まってくる。6時57分、超満員となった頂上に朝日が差し始める。一斉に歓声が上がり、手を合わせる人、写真を撮る人……、どの顔にも笑顔と決意があふれている。隣は見知らぬ人ばかりであっても、ここでは自然に新年のあいさつが飛び交う。心の結びつきが深まるとともに、一人一人の心の中に「我が町飯村」がしっかりと根付いていく。

近年400名をこえる参加者があるが、年々増加傾向にあり、誕生間もない飯村校区だが、人情の厚い住みやすい町へと成長している。

ふるさとまつり



ふるさとまつり

区画整理後、新しい住宅地として発展する飯村校区は、他地域からの転居者が中心の町であり、人と人のつながりやふるさと意識が希薄な校区であった。そこで校区が誕生した翌昭和58年より、校区に住む人々が交流を深めあい、親睦の輪を広げることを願い、ふるさと祭りが開催されることになった。

毎年8月の第1土・日曜日に飯村公園を会場に開催され、校区各種団体が軽食、飲み物、

遊具などの趣向をこらした屋台を設営し、声をからして客を招く中、櫓からは太鼓の響きとともに盆踊りの歌に合わせて、踊りの輪が広がり、祭りも最高潮に達する2日目、手筒花火や打ち上げ花火が空を彩り、祭の終幕となる。校区民にとって楽しい夏のイベントである。

文化祭

各種展示や芸能発表が中心となる市民館祭りは、平成14年より校区市民館だけでなく、飯村分館も使い、校区文化祭として大々的に行われている。

体育祭

9月第2日曜日は、町内の団結力と親睦を図る毎年恒例の校区体育祭である。体育委員や体育指導員を中心に、各種団体の役員が積極的に協力して運営されている。

競技種目には町別対抗種目とオープン参加種目があり、年齢に応じた種目も用意され、幅広く校区民が参加する体育祭となっている。最近では全員参加のじゃんけん大会や、お楽しみ抽選会が好評である。

資源回収は飯村方式！

飯村校区のゴミステーションは東三河で一番汚いといわれるほど荒れていて、不審火も何度か発生していた。困った町内会は平成11年、それまで75か所だったゴミステーションを、各組ごとの219か所に増設して、各組長が監視するスタイルに変更した。ところが、出されたゴミを見ると、新聞紙や段ボールなど資源になるゴミが大量に含まれており、もったいないという声が組長から上がった。知恵を絞る中で、ゴミステーションに収集日とは異なる日に出してもらえば回収できるということで、ゴミステーションを使っての資源回収が試験的に行われた。そして、平成12年6月より飯村校区の全町内のゴミステーションを利用して、校区内の資源回収業者に参加

いただき、月2回の資源回収が開始された。

飯村一区：第2・4火曜日

飯村二区：第1・3火曜日

岩屋、東山：第2・4土曜日

それまでの小・中学校PTAの手による資源回収は、あわせて年6回であったが、年24回に増えた『飯村方式』の資源回収は回収の手間の軽減とともに各家庭の評判もよく、校区外からも脚光を浴びることになった。

地名ものしり帳

飯村の旧名『飯』はいかに？

江戸時代、私たちの飯村はすでに「飯村」と記し、「イムレ」と呼ばれていた。しかし、「飯（イ）」としか記載のない資料に出会うことがある。なぜ村がないのだろうか？

1889年（明治22）、飯村は岩崎村、岩田村、東田村、瓦町村、三ノ輪村と合併し豊岡村となった。そして、豊岡村大字飯村となるわけだが、「村」が2つもあり、おかしいということで、「豊岡村大字飯」となり、「飯（イ）」1文字の地名が誕生した。しかし、飯村と記述し「イムレ」という地名になっていたの、「大字」を廃止し、町をつける段階になり、村を復活させ「飯村町」となった。同じことは、大村でもあった。「下地村大字大」と呼ばれたときもあったようだ。

第3章 教育と文化

1 教育の充実

(1) 豊橋市立飯村小学校

所在地 豊橋市飯村南四丁目6番地の4



飯村小学校全景

学校開設

豊橋市の東部地区の市街化が急速に進み、岩田地区の区画整理に続いて飯村地区の区画整理に入り、住宅地として生まれ変わる中で昭和58年4月2日飯村小学校が開校した。岩西小学校・二川小学校の一部を分離して創設されたものであるが、区画整理の段階で小学校用地が確保されたために、広い敷地を有し、飯村公園や東部地区市民館飯村分館も隣接して恵まれた教育環境にある。

校名

「飯村小学校」という校名は、所在地が呼び方によって判断でき、校区民になじみやすく、歴史的に古く由緒ある「飯村」の名を後世に残したいという願いのもとにつけられた。「飯村」の地名は、頼朝伝説の古事にちなんでつけられたとされているが、「イムレ」とはなかなか読みづらい地名ではある。校区に旧東海道が通り、二川宿と吉田宿を結ぶ交通の要衝であった。今でも松並木の一部が残り、茶屋・二軒茶屋といった当時を偲ぶ地名を今にとどめている。

校章

・中央の円は児童の顔であり、太陽である。自然界に豊かな恵みを与えてくれる太陽の下でのびのびと健やかに育つことを願っている。



・市章と子どもの体を合成すると同時に、小学校という意味をもつ。

・校名「飯村」は時代の移り変わりと共にいくつの変遷があり、豊かな米作りの地として昔から受け継がれてきた。その変遷を篆書体（てんしょたい）で表している。

飯村小学校24年の歩み

昭和58年度

児童数662、学級数18、教職員数25

初代校長 森鋭一

- ・豊橋市で47番目の小学校として誕生
- ・「飯村校区あいさつ運動」始まる

昭和59年度

児童数636、学級数17、教職員数24

- ・校歌制定 作曲 川崎祥悦、作詞 河合俊郎の両氏を迎え発表会を開催

昭和60年度

児童数631、学級数18、教職員数27

校長 鈴木格雄

- ・男子バスケットボール部中央大会優勝
- ・サッカー部中央大会準優勝

昭和61年度

児童数636、学級数18、教職員数27

- ・「豊かな心を育てる活動推進事業」の研究指定校

児童・保護者・教師・地域が一体となって、
開かれた学校をめざした

昭和62年度

児童数677、学級数18、教職員数27
・大蔵山で「初日の出を見る会」がスタート

昭和63年度

児童数719、学級数19、教職員数27
・動物ふれあい広場完成
・学校保健大会で健康優良校として医師会賞を受賞

平成元年度

児童数759、学級数20、教職員数30
・豊橋市の体育研究部の研究協議会開催
・サッカー部中央大会優勝

平成2年度

児童数758、学級数22、教職員数32
校長 小松孝太郎
・PTA活動表彰

平成3年度

児童数771、学級数23、教職員数30
・全学年40人学級実施
・児童数・学級数が増加し、東校舎建設

平成4年度

児童数800、学級数23、教職員数31
校長 高橋敏明
・創立十周年記念式典開催
・新学習指導要領導入 生活科がスタート
・青少年健全育成会設立
・学校図書館奨励賞受賞



開校10周年記念石碑

平成5年度

児童数790、学級数23、教職員数32
・学習指導の研究指定校
・運動場の全面改修

平成6年度

児童数791、学級数23、教職員数33
・区画整理により学校の住所が、飯村南四丁目6番地の4となる
・研究発表会 研究テーマ「明日をひらく子どもを育てる授業」の研究発表

平成7年度

児童数772、学級数22、教職員数33
校長 若見年志
・学校開放日を設ける
・水の大切さを知る水1リットル体験実施

平成8年度

児童数734、学級数22、教職員数33
・「水1リットル体験」活動がテレビで全国放送される
・わんぱくチャレンジランドの開始
・コンピュータ室の新設
・スクールアートの実施

平成9年度

児童数759、学級数22、教職員数33
・全国教育美術展で学校賞受賞

平成10年度

児童数771、学級数23、教職員数32
・サッカー部中央大会優勝
・全国教育美術展で教育美術奨励賞受賞
・外国人の先生による英語の授業の開始

平成11年度

児童数773、学級数22、教職員数32
校長 近藤喜英
・飼育小屋の周囲のフェンスの設置
・教育ボランティアの導入

平成12年度

児童数795、学級数22、教職員数33
・ダイオキシン発生が心配され焼却炉が撤去

(全市)

- ・教育相談室の設置
- ・飯村方式資源回収スタート

平成13年度

児童数769、学級数20、教職員数35

校長 柴田規矩司

- ・縦割り活動の開始
- ・コンピュータ40台導入
- ・「この木なんの木」活動の導入



「この木なんの木」玄関前のクロマツ

平成14年度

児童数835、学級数25、教職員数35

- ・創立20周年
- ・学校完全週5日制実施にともなう新しい教育課程による授業の開始
- ・絶対評価の実施
- ・少人数指導・ティームティーチング実施
- ・1年生対応教員導入
- ・障害児学級の開設
- ・男女混合名簿の採用

平成15年度

児童数827、学級数25、教職員数35

校長 新美良典

- ・男子バスケット部市内大会で優勝
- ・新図書館完成
- ・強化ガラス取付け
- ・全児童に校区より防犯ブザー寄贈

平成16年度

児童数850、学級数26、教職員数43

- ・不審者対応の避難訓練を実施
- ・学校図書館の土曜日開放試行

平成17年度

児童数869、学級数27、教職員数45

- ・学校図書館の土曜日開放本格的開始
- ・愛・地球博に児童見学
- ・福祉優良校受賞

平成18年度

児童数855、学級数24、教職員数40

校長 岩瀬澄緒

- ・文部科学省より読書活動実践優良校表彰

飯村小学校の教育目標

- (1) 校訓「明日をひらく子」
- (2) 教育目標
 - ・いのちを尊ぶ
 - ・むちゅうで学ぶ
 - ・れいぎ正しく

飯村小学校の「い・む・れ」の頭文字から小学生に分かりやすく、覚えやすく、親しみやすい教育目標となっている。

飯村小学校の特色ある教育

あいさつ運動

農村地帯が区画整理事業で様相を一変、新興住宅地に変わった。古くから住みついている人と新しい人の心と心を結ぶ“架け橋”が笑顔で“あいさつ”しあうことだと考え、飯村小学校開校当時から続けられている。



ぬいぐるみを着て朝のあいさつ運動

校区ふるさとまつり

8月の第1土曜日、日曜日を飯村校区ふるさとまつりの日と決め、飲み物・ゲームなどの屋台を各種団体が開き、校区総踊りを行って校区民の親交を深めている。まつりの最終日には、手筒花火・打ち上げ花火で盛り上がっている。

初日の出を見る会

元旦の早朝、校区の東地区にそびえる大蔵山へ児童、保護者、校区民が登頂して、初日の出を仰ぎ、新年のあいさつを交わす。平成16年度の元旦には約500名が参加。

わんぱくチャレンジ大会

3年生以上の学級がそれぞれに工夫したチャレンジコーナーのお店を出し、児童がそれぞれの出し物にチャレンジし楽しむ。この日は保護者が自由な時間に来校し、子どもたちと一緒に各学級のお店にチャレンジしてもらう。

「先生がいっぱい」活動



昔のおもちゃで遊ぶ会

地域の大人や事業所から講師を迎え学年に応じて多彩な活動をする。1年生は「昔の遊びを楽しむ会」、2年生は「味噌造り」、3年生はサツマイモ作り、4年生は「水の大切さ」、5年生は福祉施設の交流を通して、思いやりを、6年生は椎茸栽培を学ぶ活動を実施している。

あいさつサミット

飯村、岩西、つつじが丘各小学校と東部中学校の児童会、生徒会が連携し、地域住民が協力して、東部中学校区をより良い地域にするために、2001年度より始まった。

あいさつを核として、人とのふれあいの大切さを考え、明るい校区を作ろうとする意識を高めながら、小中交流あいさつ運動、サミット新聞作りなど具体的な活動を展開している。

また、日本語・英語・ポルトガル語の歌詞で作られたテーマソング「OHAYOU」は、東部中学校や小学校3校で毎朝全校放送で流れ、子どもたちをさわやかな気持ちにさせている。

校歌

作詞 河合俊郎
作曲 川崎祥悦

- (1) 東山から 明け初める
三河の朝のかがやきに
いのちめざめる なかよしは
明日をひらく子 飯村の子
希望あらたに はばたいて
きたえていこう わが友よ
- (2) 殿田川から 吹き寄せる
風さわやかな まなびやに
むちゅうで学ぶ なかよしは
明日をひらく子 飯村の子
今日もげんきに 胸をはり
はげんでいこう わが友よ
- (3) たいまつ峠 夕やけて
雲ながれよる ふるさとの
れいぎ正しい なかよしは
明日をひらく子 飯村の子
みんな楽しく 手をつなぎ
たたえていこう わが母校

歌詞については、教育目標を盛り込む。具体的な校区の地名を入れる。情豊かな詞にする。などの大まかなことを定めたいえ、渥美

町在住の詩人河合俊郎さんに作詞をお願いした。どんな地名を入れるか校区でアンケートを取り、「東山」「殿田橋」「たいまつ峠」が採用された。この校歌が子供たちの心のよりどころとなってくれればと願っている。(小澤育男・元校歌制定委員会会長の話から)

(2) 豊橋市立東部中学校

所在地 豊橋市飯村北四丁目1番地の2



東部中学校正門付近

学校の概要

市街地の広がりにもなって、豊岡中学校と二川中学校の両学区の一部を学区にして開校された。市の中心部からは南東に位置し、古くからの市街地と新しく開けた住宅地が混在し、また市営や県営の大きな団地も存在している。

創立以来健全育成に力を注いできた。その一つの柱が部活動の奨励で、全員参加を基本として活発に活動し、優秀な成績を残している。特に野球は中部地区選抜大会で、サッカー一部は県大会で優勝した。

もう一つの柱として、学区内にある豊橋養護学校中等部との交流活動がある。交流活動を通してお互いの理解を深め、社会福祉についての関心と理解を深め、実践していこうとする意識を高めている。平成9年度から社会福祉協力校の指定を受け、さらに社会福祉の研究や活動を推進していくように計画している。

また、平成7・8年度、進路指導推進事業の指定を受け、働く人に学ぶ進路学習会・職業体験学習・卒業生に聞く会等で自らの生き方を考え、進路の対する実践的態度を養った。

東部中学校の教育目標

- ・自ら学ぶ生徒
- ・こころ豊かな生徒
- ・たくましい生徒

特色ある学校行事

福祉ボランティア体験学習

豊橋養護学校との交流や市内20施設（大寿園、福祉村、ケアセンター）で福祉実践活動を通して福祉体験学習を実施している。

職業体験学習

職場で働く人から、仕事を通して社会の厳しさと責任ある行動を学ぶ。また社会人として生きていくのに必要なことがらを学ぶ。

地域総合学習東部コミュニティ大学

平和、伝統文化、福祉、環境、郷土文化、健康、日本文化、芸術の学科及び基礎学力講座等を開設し、地域の方々とともに学ぶ。

東部中学校25年の歩み

昭和57年度

初代校長 市川敏夫

- ・開校式、プール起工式

昭和58年度

- ・学校給食指導研究委嘱
- ・校歌制定発表会

昭和59年度

- ・校舎増築起工式
- ・文部省自然教育推進事業「自然教室」実施

昭和60年度

- ・校舎増築起工式
- ・社会福祉活動表彰、育成会補導活動受賞
- ・学校給食表彰
- ・学校保健優良校創立記念誌発刊

昭和61年度

校長 森 正實

・市制80周年記念スクールアート参加

昭和62年度

・写生大会、文化祭開催

昭和63年度

・生徒指導推進事業委嘱
・暁天歩行実施

平成元年度

・青少年健全育成会発足
・陸上・水泳部全国大会出場

平成2年度

校長 井澤博生

・陸上部全国大会出場

平成3年度

・野球部県総合体育大会で3位入賞
・10周年記念音楽会開催

平成4年度

校長 松橋 豊

・市内春季体育大会でバスケットボール男子、
サッカー部優勝
・ふるさと交流

平成5年度

・東三河体育大会女子バスケット優勝、県総
合体育大会サッカー優勝
・合唱コンクール開催

平成6年度

・市春季体育大会で剣道女子団体優勝
・修学旅行で洋上体験実施

平成7年度

・職業体験が始まる
・2年生スキー研修

平成8年度

校長 近田郁穂

・芸能鑑賞会に林家こん平師匠来校

平成9年度

・2年生富士登山

平成10年度

校長 石原捷行

・生き生きスクール推進事業研究指定

平成11年度

・キャリア体験等進路指導改善事業研究指定
・「東中のわ」活動始まる

平成12年度

・3年高校訪問学習始まる

平成13年度

校長 大山剛三

・2年生伊那スキーリゾート・高遠青年の家で
スキー研修

平成14年度

・第1回「あいさつサミット」を開催
・あいさつの歌「OHAYOH」ができる
・水泳部全国大会に出場

平成15年度

・「開かれた学校」の研究委嘱
・ボランティア活動県知事賞受賞

平成16年度

・東部コミュニティ大学開始

平成17年度

・研究発表会

校歌

近田三郎 作詞
橋本祥路 作曲

「光は東より」

- (1) 暁告げる 弓張の
峯々そめて 指す茜
光はとおく 東より
街の眠りを よびさます
始動のひびき わきおこり
胸にみなぎる この希望
友よ大志を かけもち
展く未来へ 羽ばたこう
- (2) 世界の海へ 伸びてゆく
豊橋港を 見下ろして
白亜の校舎 ゆるぎなく
東郊台地に そびえたつ
われらが母校 東部中
自ら学び たくましく
こころ豊に 養って
展く未来へ 乗り出そう

(3) 史跡や文化財と信仰

熊野神社

所在地 豊橋市飯村北三丁目20番地の1



創立年代は、明らかでないが、三河地方に熊野信仰のさかんになった平安末期頃(約800年前)の創建と考えられる。江戸時代に入っては、歴代の吉田城主の崇敬があり、城主によって社殿の造営がしばしば行われた。祭神は、伊弉冉尊(いざなみのみこと)(伊弉那委命)、事解男命(ことさかおのみこと)、速玉男命(はやたまおのみこと)である。

現在の神殿は大正11年(1922)、拝殿は昭和6年(1931)に造営。ご神殿の屋根葺替えは昭和47年、社務所は44年4月の竣工である。例祭は、毎年10月18、19日に行われていたが、今日では若い人が勤めにでて集まらないために、豊橋まつりを避けて第4土、日曜日に行われるようになった。

戦前は、村の青年たちが多数集まり、境内に掛け行灯の類を飾り、獅子舞や紙芝居が盛んに行われた。

テレビが普及すると、一時は祭も衰退し、子ども御輿などがなくなったが、祭奉賛会が中心となって、子ども御輿が復活し、花火大会、福引き、甘酒、投げ餅など多彩な行事が行われ、大いに祭を盛り上げている。

熊野神社の由来伝説

昔から、当地には氏神様がなかったので、

本郷磯部家の地の神様を氏神様にして、今の森にお祭りした。

その後、関東方面の人と思う旅人が二人、熊野より権現様のご分身を受け、祠に納めて持ち帰り、二軒茶屋で松の根元に祠をおろして一休みし、また出発しようとしたが大人二人でも動かなくなった。子どもでも片手で軽々と動くのに、大人二人でも動かぬとは不思議だと思い、あるところで見てもらったら、この神様は、この村の氏神様になりたいとのことであった。そこで、これを当地でもらい受けた。

熊野権現は、天照大神様の伯父にあたるので、神明宮を御末社として熊野神社を御本社とした。

清晨寺

所在地 豊橋市飯村南二丁目21番地の20



寺の創立は、永禄11年(1568)と古く、曹洞宗派に属している。江戸末期には、豊岡地区最大(15人)の寺子屋として村民教化の先駆的な役割を果たしてきた。明治初年廃仏毀釈によって廃寺となったが、明治6年再興し寺号を清晨庵から清晨寺と改称した。

仏閣記によれば、往時、東北部に清晨寺池、寺山等の地名もあって、当寺が相当の大寺院であったことがわかる。

智光院（悟慶院別院）

所在地 豊橋市飯村南一丁目8番地の15



寺の創立は、享保8年（1723）であり、もとは吉田本陣、山田新左衛門の別宅であったといわれる。

開祖の智光尼は、新左衛門の娘であり、吉田城主牧野侯に仕えた土肥豊隆（茶匠二三）の側室となり、一子をもうけたが他界、仏門に帰依し、智光尼と称した。

土肥二三が、殿田川の清流を回流させる島を作り、弁財天をまつた名園も、今は、廃寺となり昔を偲ぶよすがとてない。この辺りは、二川と吉田の中間にあたり、いわゆる「あいの宿」と称し、茶屋がおかれ大名行列の際、湯茶の接待をした。ここには、古くから山田宗偏の築く庭があった。（智光院と向かい合わせのあたり）

地藏信仰

飯村地区には、吉祥寺境内と殿田池（清晨寺池）のほとり2か所にお地藏があり、古くから村の人たちより子どもを見守るお地藏様として親しまれてきた。毎年8月24日（盂蘭盆の日）にご祈禱が行われ、大勢の人が集まる。

地藏信仰は、室町時代から江戸時代にかけて定着したが、江戸時代になると、庶民の間でたいへんな信仰ぶりをみせた。寺の本堂で礼拝する仏像としてではなく、庶民の日常的な暮らしを支えるものとして、大人から子ども

まで広く村人に親しまれていった。延命、子育て、身代わり、とげぬき、泡そう、いぼ地藏など現世利益を与える存在ともなった。赤いよだれかけをする地藏の多いのは、そのためである。

殿田池のお地藏様（石川さんの思い出話）

当時、殿田池のお地藏様は岩田小学校への通学路の途中にあった関係から、時々いたずらをして、おもしろ半分にお地藏様を池に投げ込んだり、お地藏様の頭に小便をひっかけたりする子どもが多かった。

朝、登校する時には、お地藏様があったのに、帰りには姿が見あたらない。

「これはたいへんだ。」

と思い、とんで家に帰り、そのことを母に告げた。

しかし、母は、落ち着いて

「ええわ。それくらいのこと、お地藏様は子どもを守ってくださるのだから、それくらいことは大目に見てくださる。心配せんでもええ。」

といて笑っていた。そして

「それじゃあ、捜してくるで。」

といて池へ出かけた。着物の裾をたくし上げ、四つんばいになって、池の中をあちこちとかきまわしお地藏様を捜した。

しばらくかき回しているうちに、固い石にぶつかった。

「やれやれ、お地藏様すまんかったのう。子どものことだで許してくれんさい。」

と言って両手に

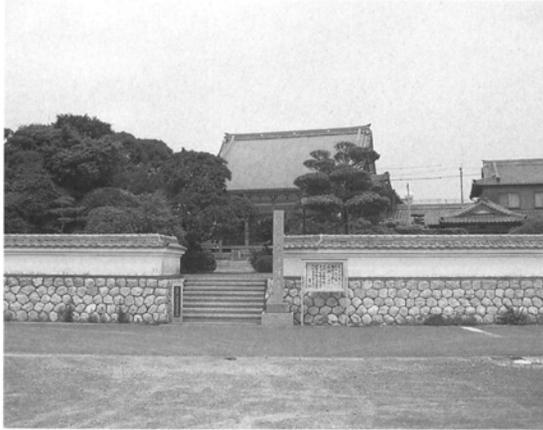
「どっこいしょ」

と抱えてもとの位置まで運んできれいな水を頭からかけ、体を清めて、お参りしたという。

こうしたことが1年のうちには、たびたびあったが、信仰深い村人によって必ず元の位置へもどされた。

吉祥寺

所在地 豊橋市飯村北四丁目4番地の15



寺の周囲には、飼場、ひつ岩、戦勝塚など頼朝にちなんだ地名が残されている。北東には、駒止め松、葦毛、鞍掛神社などの遺跡があり、平安時代、鎌倉時代に、この周辺を街道が通っていたことが想像される。

往時、この地に真言宗の寺があり、十二間四方の庚申堂があり、村民の信仰を集めていたが、頼朝によって焼き払われ、衰退し荒廃した。その後、再興されたのが吉祥寺と伝えられている。

当寺の開山は、大円光覚禪師雲竜和尚で、初めは嵩山正宗寺に住したが、後年、老津太平寺の中興となった名僧で、天正2年(1574)に当寺を創して開山となったと寺伝には記されている。

仏閣記によれば、延宝3年(1675)時の城主小笠原長祐侯より土地の寄進を受けており、当寺の庚申堂がいかに有名であったかが想像される。

庚申堂の他に、半僧坊地藏尊(通称 叶う地藏)が安置されている。叶う地藏とは、願い事が叶うということであり、ご利益の顕かな地藏として庚申信仰とあいまって村民の厚い信仰心を集めてきた。

庚申信仰

庚申信仰は、道教の呪術的信仰に基づくと

いわれ、我が国では平安初期以来行われ、江戸時代に入ってから民間習俗として全国的に広まった。

飯村校区では、11月の申の日に庚申仲間が、まわり番でその当番の家に集まり、庚申様(仏像青面金剛童子の掛け軸)を飾り、お供えをし、百万遍をとこな夜明かしをする。12時を過ぎれば夜明かしできたとされ、勤行の後には、食事や雑談をして帰るのである。

一里塚

所在地 豊橋市飯村町西山

飯村町と下地町に一里塚があったが、今はそれらしいものが残っていない。慶長9年(1604)徳川家康が秀忠に命じて、江戸の日本橋を基点として36町を一里(約4km)とし、全国的に築かした。

一里ごとにその標示として、道路の両側に塚を築き、その上には榎や松を植えたので一里山、一里松、二本榎などとよばれた。地名としても東細谷町に一里山として残っている。松並木同様に旅人が休息したり、距離を的確に知ったりすることができてとても便利なものであった。

飯村校区の一里塚跡は、西山地内の旧東海道と国道1号線が交わるところにひっそりと建っている。江戸から73里と記されている。

岩屋観音

所在地 豊橋市大岩町火打坂



岩屋観音堂は、天平2年(730)行基が諸国巡礼の途中、千手観音像をきざんで岩穴に安置したのが起源であるといわれる。

この観音堂は、亀見山大岩寺の境外仏堂である。大岩寺は、現在大岩町当郷内にあるがもとは岩屋山の麓にあった。天正13年(1585)観音堂は、火災炎上した。現在の観音堂は文政8年(1825)に再建されたものである。

地元吉田の俳人古市木朶によって詠まれた「かすむ日や 街道一の 立仏」で有名な濡れ仏は、東海道を旅する人たちの心をなごめ、なにものにも勝る道標のひとつとして愛されてきた。この濡れ仏は、宝暦4年(1754)江戸下谷の「岩屋講中」の手で作られたものであるが、建立には次のような話がある。

宝暦4年吉田藩主松平信復は、江戸下谷に住む腕利きの大工善左衛門・茂平の両名に豊川の架橋を命じた。ところが、拝命した両名は、その工事の至難なことに驚いて、7日間この観音堂に参籠して一心に架橋成就を祈願した満願の夜半、夢うつつのうちに、両人は川に一筋の縄が流れていくのを同時に見た。

これこそ観音様のお告げと、翌日工事現場に駆けつけると、縄を川に張り渡し水の勢いで縄がアーチを描くのを見ながら橋の反り加減に自信を得てついに架橋工事を完成することができた。二人は、面目をほどこして江戸に帰り、大任をなしたのは岩屋観音のおかげと、さっそく「岩屋講」をつくり、1丈2尺の濡れ仏を岩上にまつたという。

この濡れ仏も戦争中、軍に供出される運命となり、しばらくの間、岩上より姿を消し、戦後の昭和25年再建され現在に至っている。観音堂の入り口に1本の道標が建っているが、江戸下谷講中が明和2年(1765)寄進したものである。(「岩屋観音と大岩寺展」より)

しかし、輝政侯の子孫の綱政もこの観音を崇拜し、東海道通行の際には、必ず参籠したという。

宝永4年(1707)綱政が江戸から国元への帰途白須賀宿へ泊まった夜半、「大津波がある

により早そうに立ち去れ」と観音様のお告げによって急ぎ供ぞろえをし、津波の難を逃れた。その礼代として黄金灯籠を一对観音経一卷、絵馬4枚が奉納されている。それらは、豊橋市文化財に指定されている。

東海道の松

所在地 豊橋市岩屋町

この松は、江戸時代の初め、街道保護策の一つとして植えられ、参勤交代の行列や旅人に風情を与え、夏季には、緑陰の下に休息の便を与え、冬季には、風雪から難を逃れるものであった。松並木の保護・植継ぎは周辺の村に厳しく義務づけられていた。

東海道の松も、昔は100数本を数えたが、昭和47年には102本、53年には5本、62年には4本、そして現在は1本が残るのみである。道路の開発で伐採されたり、マツクイムシの被害が主な原因である。

平成18年4月、豊橋市制100周年を記念し、飯村地区の旧東海道の松並木を復活させようと地域、小学校児童らが松の苗木5本を植樹した。



(4) ふるさとに伝わる昔話

「飯村王塚」のお話

飯村の西山（現在の飯村北一丁目）に「前山の小塚」と呼ばれた所がありました。大正11年、一人の農夫が荒地を畑にしようと耕していた時、ゴツンと鍬が大きな岩にあたりました。岩をどけると石で囲まれた部屋があり、そこから玉飾りや、金色が残る剣の破片などが出てきました。村人たちは警察に届けました。宝の一部を東京の偉い先生に送ったところ、大変価値のあるものだと思われ知らせが来ました。「前山の小塚」は、この地方の有力者の墓だとわかり、「王塚」と呼ばれるようになりました。調査の後、塚は埋め戻されましたが、蓋をしていた大岩は皆で転がして隣の畑との境に置いてあったので、そのままにされました。

時は流れ、戦後飯村の土地は次々と住宅地に変えられていきました。王塚のあった場所にもブルドーザーが入ることになりました。でもその前に、塚があった場所を御祓いしてもらうことになりました。この町内で言い伝えられてきた塚を勝手に壊してしまっただけでは、後で祟りでもあったら大変だと人々が恐れたのです。「せんちょう塚」や「こうしん塚」など、もちろん「王塚」もお祓いしてもらいました。

お祓いをすませて、ようやくブルドーザーが入りましたが、そこに塚の蓋だった岩が横たわっていました。

「どれ、道端によけとくとするか」

岩は道端にドシンと音をたてて置かれました。

ある日、近所に住む小学3年生のまあ君は、道端の岩を見て、

「でっけー岩だなあ、なんでこんなところにあるんだ。」

と言って、岩に登ったり飛び下りたりして遊

んでいました。その日の夜からまあ君の様子がおかしくなりました。夜中になっても、

「遊ぶー、もっと一緒に遊ぶんだ。」

と叫んで眠らなくなったのです。家の人たちは心配してお医者さんに見せたりしましたが、全然治りません。

「もしかしていつも王塚の岩で遊んでいるから、その祟りじゃないか。」

「でも王塚はお祓いしたでしょう。」

「いや、あの岩は別の場所においてあったんだ。」

お母さんたちはお祓いしてくれる人を探し、山にこもって修行を積んだ偉いお坊さんをお願いしました。まあ君を見たお坊さんは、「塚の主はこの子と遊びたいだけだから、何も心配することはない。ただ眠らないと体もたないから、このお札をいつも首からつる下げておくといい。」

と言いました。

やはりあの岩が原因だったとわかり、地主さんに岩を埋めてくれるように頼みました。地主さんは秋葉神社の片隅に岩を埋め、供養しました。まあ君は夜も眠れるようになり、すっかり元気になりました。

飯村町の田畑が住宅街に変わり、岩を埋めた秋葉神社も熊野神社の中に合わせて祀られることになりました。今では王塚がどこにあったかもわかりません。

飯村王塚

飯村には、大岩古墳群、火打坂古墳群、さらにこれより東には北山、チャンチャカ山古墳群が連なっている。これらの古墳は、明治の中頃には、すでに盗掘され、その後の戦後の宅地造成のために、大部分が破壊されてしまった。

飯村王塚は、熊野神社の西方500～600mほどの地にあった。今から80年ほど前に、植村

幸太郎氏が開墾したとき、石室より刀剣や金環、勾玉が出土した。勾玉を東京の博物館へ送ったところ品物は没収され、当事のお金で50円ほどだったそうだ。

「金次の榎の木」のお話

昔、飯村の里茶屋に、子ども三人でもかかえきれないほど大きな榎の木があった。

「今年も金次さんちの榎の実は、えらいたんとみのってのん。」

「こんな囲いがあっちゃあ、一粒ももらえんぞん。」

村人たちは、熟した榎の実が木から落ちるのを横目で見ながら大きな構えの家を遠巻きにしてうわさしあった。

秋も深まった夕暮れ、旅のお坊さんが、この木の下で立ち止まった。

「立派な榎の木じゃ。こんな木になる実は一段とうまかろう。」

感心して眺めていると、持ち主の金次が、大きなざるを抱えてやってきた。

「あんたがこの木の持ち主かな？ 私は旅の僧じゃが、あんまり素晴らしい木なので、見とれてたんじゃ。あの実を少し分けてくださらんか。」

金次は、下を向いたまま忙しそうに榎の実を拾いながら言った。

「この木は確かにわしのもんだ。一粒だって渡せるもんか。さっさと行きな。」

「大事になさる気持ちは分るが、囲いの外に落ちている実でも・・・」

いくら頼んでも金次は振り向きもせず、落ちた実をかき集めるのに夢中だった。

「早くせんと日が暮れる。リスやムジナにとられたら大変だ。邪魔するな。」

旅のお坊さんは、やっと、あきらめたのか、袂から数珠を取り出すと、榎の大木に向かって、静かに手を合わせた後、さっと、右手を

さしだした。

「花は咲いても、実はなるな。」

突然の大声にびっくりしたが、金次はまだ拾い続けた。

月日は、またたく間に流れ、次の年の秋が来た。

「さてと、そろそろ初物を探そうかな。ふっくらふくらんだうまい実を・・・」

金次はわくわくしながら、枯れ草の間にそっと隠れている実を探し始めた。

「やや、何だ？ これは、実がないぞ。へたばっかりだ。」

秋が過ぎ、雪が降る頃までも、榎の実を必死に探す金次の姿に村人は声もかけられなかった。

ある夜、夢の中で金次の耳に届いたのは、いつかのお坊さんの声だった。

「私を覚えているか。あの日、私がいくら頼んでも、榎の実を分けてはくれなかった。気の毒とは思ったが、榎の木に祈りをかけたのだよ。もし、自分の欲張りを悔い改めるなら解いてやろう。」

金次はお坊さんに負けないうくらい大声で言った。

「これからは、決して独り占めにはいたしません。お許してください。」

その年から、また榎の実は、どっさりとれ、村人たちと仲よく分け合って食べたと言うことだ。

地図に見る飯村校区の移り変わり1 <明治32年>



- ・この時代の飯村には、本郷、中島、二軒茶屋、茶屋の小集落があるだけで、約110世帯、470人ほどの農村で、豊岡村の一部であった。農村といっても岩田や多米のように豊かな水田が広がる地帯ではなく、低地は水田や沼沢地、丘陵は畑や荒地が広がっていた。
- ・東海道筋には、松並木が連なり、遙か彼方から3本の大松が望めたので三本木という字名が生まれたといわれている。
- ・豊橋の町は、市街地が豊橋町、その周囲に豊橋村、花田村、福岡村、高師村、豊岡村、牛川村などが取り巻いていた。
- ・牟呂用水は明治21年市街地をさけて造られ、新川と呼ばれていた。



明治末期の岩屋山登山道入口

地図に見る飯村校区の移り変わり2 <大正14年>



- ・歩兵18聯隊や15師団が設置されて以後、豊橋は軍都として発展していく。高山の射撃場、岩西の予備士官学校、向山の工兵隊、牛川の射撃場などがつくられ、それらを結ぶ直線上の道路が建設された。牛川の射撃場は吉田藩の洋式射撃訓練場として幕末に造られ、終戦後には牛川遊歩公園として整備された。
- ・市街地が牟呂用水の東側、南側へと広がってきている。
- ・現在の火葬場は昭和7年に大池の東側から移転し今日に至っている。
- ・昭和8年、高山に市立結核療養所がつけられた。



大正初期の三本木・西より東を望む

地図に見る飯村校区の移り変わり3 <昭和25年>



- ・ 人家は本郷、中島、二軒茶屋や茶屋に小さな集落として存在し、昭和26年には岩屋、東山を除く飯村の人口は253世帯、1302人でした。
- ・ 道路は東海道と、軍隊が射撃場と宿営地との間を行き来する道が主なものであった。
- ・ 国道1号線、新幹線はなく、東海道の両脇には松並木が、また三ノ輪本興寺にはお寺や焼き物工場の煙突があったことが分かる。
- ・ この地域の学校は岩田小学校、豊岡中学校があり、岩西小学校（昭和26年開校）、豊小学校（昭和54年開校）、飯村小学校（昭和58年開校）、つつじが丘小学校（平成7年開校）、東部中学校（昭和57年開校）はまだ存在していない。



豊岡中学校から見た飯村校区（昭和40年）

地図に見る飯村校区の移り変わり4 <平成2年>



- ・田畑や荒地が住宅地となり、道路が整備されてきた。飯村町とあるが、昭和45年に飯村一区、二区と町名変更された。殿田川の流路も変更され、殿田橋周辺の洪水が解消された。
- ・岩屋、殿田橋間の国道一号線が昭和33年に完成し、東海道と分離された。
- ・岩西地区の第二予備士官学校跡地に、岩西小学校、保育短期大学、県営・市営住宅、福祉施設がつくられた。
- ・岩屋山北側の東海道の道筋が昭和26年に整備され、国鉄（JR）バスが豊橋駅前と二川、新居方面とを結んで走っていた。このバスは平成14年に廃止された。



殿田川兩岸は絶好の散歩道

私たちのふるさと飯村のあゆみ

	西 暦	和 暦	日本の歩み・愛知のあゆみ	豊橋のあゆみ・飯村のあゆみ
旧石器時代	50年万前		日本列島に人が住み始める	
	10万年前		かりや漁をしてくらしていた	浜北人(1万4千年前) 牛川人(獣骨説もあり。今後の研究待ち)
縄文時代	1万年前		縄文式といわれる土器を焼いたり石器を使って狩猟採集生活をしていた	三ヶ日人(9500~7500年前) 嵩山の蛇穴 石塚貝塚 小浜貝塚 吉胡貝塚 大蚊貝塚 大西貝塚
	BC200		たてあな式の住居に定住し、大陸から伝わった米作りが広まり、農耕生活が始まる。弥生式土器が普及し、金属器も使われ始める	白石遺跡
弥生時代	57		倭奴国王、後漢に使者を送る	瓜郷遺跡 橋良遺跡 高井遺跡
	AC200 239 478		邪馬台国卑弥呼、魏に使者を送る 倭王武、中国に使者に使者を送る 大和朝廷がほぼ国土を統一 古墳が各地につくられた 百濟より仏教伝来 任那の日本府、新羅に滅ぼされる 聖徳太子、摂政となる 憲法十七条が定められる 小野妹子を随に派遣 法隆寺が建てられる 大化の改新	権現山古墳、茶白山1号墳や東田古墳が造られる 馬越長火塚古墳、磯辺王塚古墳、牟呂王塚古墳が造られる。 また飯村王塚もこの頃のものと考えられている 北山古墳群・チャンチャカ山古墳群・火打坂古墳群などの群集墳が造られる
古墳時代	538 562 593 604 607			東三河は穂の国と呼ばれていた
	645 701 702	大化元 大宝元 大宝2		穂の国から三河国となる 初代三河国司が任命される 持統天皇、三河に行幸
奈良時代	710 717 741 743 752	和銅3 霊龜3 天平13 天平15 天平勝宝4	奈良に都が移される 国分寺・国分尼寺建立の詔 聖徳太子、摂政となる 憲法十七条が定められる 小野妹子を随に派遣 法隆寺が建てられる 大化の改新	雲谷の普門寺が建てられたといわれている
	794 796	延暦13 延暦15	京都に都が移される	三河国など婦女を養蚕教育のため陸奥へ派遣 9世紀前半から11世紀まで二川から飯村校区にかけて灰釉・緑釉陶器が焼かれ、東三河、駿河、関東一円に出荷されていた 石巻神社、従五位下を授かる
平安時代	851 894 935	仁寿元 寛平6 承平5	遣唐使廃止 平将門の乱	荘園がめだちはじめ、平安時代の末には高足御厨・野依御厨などのように渥美郡内のほとんどの耕地は神領となった
	1016 1020 1167 1185	長和5 寛仁4 仁安2 文治元	藤原道長、摂政となる 平清盛、太政大臣となる 壇ノ浦の戦い、平氏滅亡 源頼朝、守護地頭を設置	更級日記の著者菅原孝標女、高師山、しかすがの渡しを通る
鎌倉時代	1192 1196	建久3 建久7	源頼朝が鎌倉に幕府を開く	奈良東大寺再興、伊良湖瓦場で瓦を焼く 三河の守護安達盛長が神明社・吉田神社・赤岩寺等を建る
	1221 1232 1274 1281 1333 1334	承久3 貞永元 文永11 弘安4 元弘3、正慶2 建武元	承久の変 御成敗式目制定 元寇、文永の役 元寇、弘安の役 鎌倉幕府滅亡 建武の新政	地頭安達泰盛、東観音寺へ金銅馬頭観音の懸仏寄進
室町時代	1338 1349 1360 1378 1465	暦応元、延元3 貞和5、正平4 延文5、正平15 天授4、永和4 寛正6	足利尊氏が京都に幕府を開く 足利義満、幕府を室町へ	足利直義、高師直が争い、三河の諸將2つに分かれて戦う 西郷彌正左衛門尉、三河国守護の要請で矢作に出兵
	1467 1499 1505 1506 1522	応仁元 明応8 永正2 永正3 大永2	応仁の乱がおこる	この頃から今川氏と三河国人との抗争始まる 戸田宗光、二連木城に移る 今川記に船形山の合戦の記述あり 牧野古白が今橋城を築城する 今川氏親、今橋城を攻略、牧野古白討死 牧野信成(古白の子)、今橋を吉田と改める

	西暦	和 暦	日本の歩み・愛知のあゆみ	豊橋のあゆみ・飯村のあゆみ
	1529 1537 1540	享禄2 天文6 天文9		松平清康、吉田城を攻略し、東三河を支配する 戸田康光、吉田城を攻略 市内飽海町の磯部忠右衛門が飯村に挿し開墾に着手する。唐沢池、山の神池、白ヶ池、清農寺池などのため池が造られる
	1543 1546 1547 1549 1560 1564 1568 1570 1571	天文12 天文15 天文16 天文18 永禄3 永禄7 永禄11 元亀元 元亀2	ポルトガル船種子島へ漂着、鉄砲伝来 キリスト教伝来 桶狭間の戦い	今川義元、吉田城を攻落し、戸田氏を追う 戸田康光、人質の竹子代を奪い、織田氏に送る 徳川家康、吉田城を攻略し、酒井忠次を城主に 日暁山清農寺開山する 豊川に土橋がかかる 武田信玄、吉田城を攻撃
安土桃山時代	1573 1574 1575 1582 1590 1600 1601	天正元 天正2 天正3 天正10 天正18 慶長5 慶長6	織田信長、室町幕府をほろぼす 長篠の戦い 本能寺の変 豊臣秀土口全国統一 徳川家康が江戸に移る 関ヶ原の戦い 東海道に伝馬制、吉田に宿駅設置	庚申山吉祥寺開山する 池田輝政、吉田城主となる 吉田城本丸御殿完成
	1603 1604 1615 1622 1635 1639 1643 1644 1654 1663 1667 1669 1681 1689 1700 1705 1707 1716 1722 1723 1729 1735 1736 1751 1752 1765 1783 1787 1800 1825 1837 1844 1853 1854 1858 1867 1868 1869 1871 1872 1873 1874 1876	慶長8 慶長9 元和元 元和8 寛永12 寛永16 寛永20 正保元 承応3 寛文3 寛文7 寛文9 天和元 元禄2 元禄13 宝永2 宝永4 享保元 享保7 享保8 享保14 享保20 元文元 宝暦元 宝暦2 明和2 天明3 天明7 寛政12 文政8 天保8 弘化元 嘉永6 安政元 安政5 慶応3 明治元 明治2 明治4 明治5 明治6 明治7 明治9	徳川家康が江戸に幕府を開く 大阪夏の陣、武家諸法度 参勤交代制度確立 ポルトガル船来航禁止、鎖国 田畑の永代売買禁止令制定 徳川家康が江戸に幕府を開く 享保の改革 幕府、新田開発を奨励 天明大飢饉 寛政の改革 伊能忠敬、全国測量開始 異国船打払い令 大塩平八郎の乱 ペリー、浦和に来航 日米和親条約締結 日米修好通商条約締結 大政奉還、王政復古 明治維新 廃藩置県 ・県内の12の藩は10の県となる ・西尾、岡崎、刈谷、半原、拳母、田原、西端、西太平、吉田、重原の10県は額田県となる 渥美郡は額田県に入るが、額田県は愛知県に合併される 学制発布 徴兵制、地租改正令	慶長検地による飯村の石高351石、江戸時代を通じ、飯村の石高は351石から488石ほどであった飯村、下地、細谷に一里塚設置 暴風雨により吉田大橋流失、翌年修復 吉田大橋架替え工事 二川宿を吉田領から天領に移す 向山大池を築き、吉田城外堀に水を引く 清洲新田の開発、この頃より町人資本による新田開発盛んになる（高須・土倉新田1665、加藤新田1696、青竹新田1770） 瓦町で初めて瓦が焼かれる 岩鼻池が造られる 前芝灯明台築造 飢饉が続き、餓死者多数、疫病も流行 吉田船町と高足村で伊勢渡船争議 井原西鶴編「一目玉録」に「茶屋の中に饅頭とそば切りの上手なところである」と飯村名物の記述あり 吉田天王社祇園祭で初めて仕掛け花火 吉田領東西境杭（飯村境、伊奈境）設置される 宝永大地震、吉田全戸が被害、吉田城本丸御殿倒壊、今切渡し危険となり本坂道通行者激増 竜粘寺末寺智光院開山する 5月本坂峠を象が江戸に向け通過、気賀で宿泊し浜松へ 二川宿本陣全焼、以後1793年1806年全焼 吉田町札木大火、1779年にも 吉田大橋架替え工事 吉田藩校、時習館創設 岩屋観音建立、開眼供養を行う 高足村庄屋源吉の年貢減租運動起こる 『三河国名所図絵』に飯村の名物として饅頭とそば切りを紹介するとともに、黒豆入りの強飯の味はたいへんよいと紹介 李野甚七、海苔養殖に取り組む 大地震、三河各地に被害 幕末の戸数と人口は、飯村（本郷、中島、二軒茶屋）68戸294名、茶屋28軒であった牟呂村にええじゃないか騒動起こる 吉田藩を豊橋藩と改める 豊橋藩を豊橋県と改称 呉服町に豊橋郵便局を開設 11月に岩田小学校開校する 朝倉仁右衛門ら座繰製糸を始める 飯村（本郷、中島、二軒茶屋、茶屋）の戸数と人口は、106戸、467人であった西山地区官有林の払い下げがあり、東田の人が購入する
江戸時代				
明治時代				

	西 曆	和 曆	日本の歩み・愛知のあゆみ	豊橋のあゆみ・飯村のあゆみ
明 治 時 代	1877	明治10	西南戦争	豊橋に渥美郡役所が置かれる 明治天皇の御通覧に際し、火打坂を避け岩屋観音下を迂回する道路を開通させる 佐野重作が製筆業を開業、豊橋筆の礎を作る この頃瓦製造所は飯村と三ノ輪あわせて9軒あり、一大産地であった 小淵志ち、玉糸製糸を操業
	1878	明治11		飯村（本郷、中島、二軒茶屋、茶屋）の人口は、460余人
	1879	明治12		豊橋高等小学校開校
	1881	明治14	国会開設の詔	歩兵第十八聯隊が豊橋市におかれる
	1885	明治18	市制・町村制公布	東海道本線開通豊橋駅が完成
	1888	明治21		牟呂用水開通
	1889	明治22	大日本国憲法発布 府県制・郡政公布、第1回衆議院選挙、 第1回帝國議會	この頃西山地区の開拓が始まる 豊橋町制施行、初代町長三浦碧水
	1890	明治23		毛利新田完成 この頃飯村でも養蚕が盛んになる
	1894	明治27	日清戦争	豊橋村を豊橋町に合併 神野新田完成
	1895	明治28		豊橋町立高等女学校開校
	1896	明治29		
	1902	明治35	日露戦争	豊橋俘虜収容所を悟心寺と高師原に設置 豊岡村、花田村を合併し、市制を施行 私立豊橋商業学校開校
	1904	明治37		第十五師団が高師村におかれる
1905	明治38		市内に電話開通	
1906	明治39		高師原・天伯原が陸軍演習場になる 高山に陸軍射撃場が造られる	
1908	明治41			
1909	明治42			
大 正 時 代	1912	大正元	元号が大正と変わる	高山の山腹に陸軍の貯水池が造られる 豊橋市立図書館開館
	1913	大正2		
	1914	大正3	第一次世界大戦	
	1918	大正7	米騒動	豊橋市内でも米騒動起きる 茶屋、二軒茶屋に電灯がつく 飯村王塚発見される
	1919	大正8		
	1922	大正11		
	1923	大正12	関東大震災	
1925	大正14	治安維持法公布 普通選挙法公布 ラジオ放送がはじまる	第十五師団が廃止される 市内電車開通	
昭 和 時 代	1926	昭和元	元号が昭和と変わる	
	1927	昭和2	金融恐慌	
	1929	昭和4	世界恐慌	
	1930	昭和5		全国産業博覧会開催 飯村、岩崎をのぞく全地域に上水道完備 三郷に住んでいた武田氏らによって西山地区の開拓が始まる。 豊橋公会堂竣工 私立豊橋病院開院 豊橋市がまわりの町村（牟呂吉田、下地、下川、高師、多米）を合併 豊橋市畜場が現在地に向山より移転 飯村町高山に豊橋市立結核療養所ができる 豊川河港、前芝港、牟呂港、大崎港を統合し、豊橋港として内務省指定港となる 豊橋乾餾取引所開設 磯部幸一郎氏、甘藷の増産多収穫コンクールにて全国一となる(翌年も)。「サツマイモは飯村」といういわれる基礎を作る
	1931	昭和6	満州事変	
	1932	昭和7	五・一五事件	
	1933	昭和8		
	1936	昭和11	二・二六事件	
	1937	昭和12		
	1938	昭和13	国家総動員法公布	
	1940	昭和15		
	1941	昭和16	太平洋戦争開戦	
	1943	昭和18		この頃南瓜を共同出荷し、西山南瓜が評判になる
	1944	昭和19	B29、本土空襲開始	大崎島に豊橋海軍航空隊が開隊 豊川、鳳来寺、三信、伊那の4鉄道が合併し飯田線となる 歩兵十八聯隊、歩兵百十八聯隊グアム他で玉砕 本土決戦に備え、怒部隊、独立戦車第八旅団が配備、飯村校区にも多数の陣地できる 市内空襲、全戸数の70%が焼失 豊川海軍工廠爆撃、死者2500人、負傷1万余 敗戦後、駅前大通に闇市が繁盛 高山地区の開拓が始まる 愛知大学できる
	1945	昭和20	広島長崎に原子爆弾が投下される 太平洋戦争終戦 ポツダム宣言を受諾	豊岡中学の前身東部中学校が開校 八町練兵場跡地に豊橋球場、翌年陸上競技場できる 武田治三郎氏、ブドウ作りに着手 民衆駅第1号として豊橋駅新築される 東海道線の電化工事始まる 豊岡中学校開校する 市内小学校の完全給食始まる 東山地区旧東海道火打坂交差点がT字交差点となる 岩西小学校開校する
	1946	昭和21	農地改革実施、日本国憲法公布	天竜東三河総合開発計画が決まる。
	1947	昭和22	6・3制の教育始まる	台風十三号来襲。豊橋各地に大被害 吉田城址で豊橋産業文化大博覧会開催される 豊橋動物園開園
	1948	昭和23		二川、石巻、高豊、老津、前芝の1町4村合併 豊橋の人口20万人
1949	昭和24			
1950	昭和25			
1951	昭和26	平和条約が結ばれる		
1952	昭和27	テレビ放送始まる		
1953	昭和28			
1954	昭和29			
1955	昭和30			

	西暦	和 暦	日本の歩み・愛知のあゆみ	豊橋のあゆみ・飯村のあゆみ
昭 和 時 代	1956	昭和31	国際連合に加わる	巨峰の生産が盛んとなり、種なし巨峰の開発
	1957	昭和32	人工衛星がうち上げられる 一万円札登場	二軒茶屋に上水道敷設される 豊橋海軍航空隊跡地に東都製鋼進出 牛川人骨発見される。日本最古の化石人骨として注目される
	1958	昭和33		国道一号線 岩屋・殿田橋間の東海道からの分離新設工事完了
	1959	昭和34	安保闘争激化	伊勢湾台風襲来、県下に被害甚大
	1960	昭和35		豊橋市児童文化センターできる
	1961	昭和36		高山に清掃センターがつくられ、69年より焼却炉が稼働する
	1962	昭和37	原子がに火がともる	高山に県農業試験場豊橋経営実験農場建設
	1963	昭和38	東海道新幹線開通	東三河工業整備特別地域に指定される
	1964	昭和39	東京オリンピック	豊橋市民愛市憲章できる 新幹線豊橋駅できる
	1965	昭和40		三河港、重要港湾に指定される
	1966	昭和41		豊川放水路完成する
	1968	昭和43	東名高速道路全線開通	多米峠有料道路できる
	1969	昭和44	アポロ11号月面着陸に成功 大阪万国博覧会開催	豊川用水全面通水 市内中学校の完全給食始まる
	1970	昭和45		豊橋こども自然公園（動物園）できる
	1972	昭和47	沖繩復帰	野外教育センターできる 豊橋港開港、少年自然の家できる
	1973	昭和48	日中平和友好条約の発効	旧街道飯村町内松並木生木102本、枯木11本
	1974	昭和49	第1次石油ショック	
	1975	昭和50		豊橋市視聴覚教育センター完成
	1976	昭和51	成田国際空港開港	530運動スタート 飯村の人口616世帯2,549人
	1977	昭和52	東京サミット開催	飯村地区区画整理事業スタート
1978	昭和53	学校内・家庭内暴力事件続発	豊橋技術科学大学開学	
1979	昭和54		美術博物館開館、豊橋の人口30万人	
1980	昭和55	静止衛星「ひまわり2号」打ち上げ成功	岩田運動公園に豊橋市民球場オープン	
1981	昭和56	東北・上越新幹線開業	地下資源館開館、資源化センター（ユールックス）開設	
1982	昭和57	テレホンカード使用開始		
1983	昭和58	東北大で日本初の体外受精児誕生	豊橋市立東部中学校が豊岡中より分離開校 中央図書館開館	
1984	昭和59	男女雇用均等法が成立	豊橋市立飯村小学校が岩西小より分離開校	
1985	昭和60	東北・上越新幹線上野駅開業	岩田運動公園ができる	
1987	昭和62	国鉄が分割民営化され JRとなる		
1988	昭和63	瀬戸大橋開通	中国南通市と友好都市となる	
		青函トンネル線開通	豊橋市自然史博物館ができる	
平 成 時 代	1989	平成元	平成と改元	豊橋市総合体育館ができる
	1990	平成2	消費税3%スタート 普賢岳噴火	万場調整池完成、東三河環状線開通
	1991	平成3	東西ドイツ統一、ソビエト連邦消滅	二川宿本陣資料館できる
	1992	平成4	雲仙普賢岳で火砕流発生	豊橋総合動植物公園できる
			新幹線「のぞみ」東京大阪間を2時間30分に短縮	市教育委員会が韓国晋州教育庁と友好提携結ぶ
	1993	平成5	毛利さん宇宙より帰還	葦毛湿原が県の天然記念物に指定される
			サッカーJリーグ開幕	豊橋市が35万都市になる
	1994	平成6	皇太子殿下ご結婚	中消防署が中松山町に移転する
			関西空港開港	ライフポートとよはしができる
	1995	平成7	向井千秋さん宇宙より無事帰還	東部地区市民館飯村分館開館
			阪神大震災発生	市電国道1号線部分のセンターポール化完成
	1996	平成8		飯村土地区画整理事業 19年の歳月を要し無事完工する
				新しい市民病院ができる
	1997	平成9	地下鉄サリン事件発生	豊橋市役所が新しく改築
			消費税が5%にアップ	牛川校区で県下初の「子ども110番の家」実施
	1998	平成10	英国ダイアナ妃が事故死	
			香港が中国に返還	公会堂ならびに愛知大学旧本館が国の文化財に指定される
	1999	平成11	長野オリンピック冬季大会開催	市電が駅前広場まで延伸する
		明石海峡大橋が開通	豊橋市が中核市となる	
2000	平成12	欧州で単一通貨ユーロ導入	竜巻による大きな被害を受ける	
		シドニーオリンピックで高橋尚子が初の金メダルを獲得	アメリカ オハイオ州トリード市と姉妹都市提携調印	
2001	平成13	米国多発テロ事件発生	羽田八幡宮文庫が国の文化財に指定される	
		敬宮愛子親王ご誕生	「飯村方式」資源回収始まる	
2002	平成14	W杯サッカー日韓共同開催で日本ベスト16	瓜郷遺跡の復元家屋全焼する	
		北朝鮮より拉致被害者帰国	豊橋総合スポーツ広場・多目的スポーツ広場が開場する	
2003	平成15	火星に探査機着陸	資源化センターの新焼却炉が完成する	
		地上デジタル放送開始	豊橋市が地震防災対策強化地域に指定される	
2004	平成16	イラクに自衛隊派遣	豊川用水が大島ダムの供用を始める	
		アテネオリンピック開幕	飯村地内を走るJR路線バス 不採算により廃線となる	
2005	平成17	中部国際空港セントレア開港	西武百貨店豊橋店が閉店する	
		愛知万国博覧会開催	ゴミの分別が7分別に変更される	
2006	平成18	第1回ワールドカップベースボール大会で日本優勝	飯村地区の人口は11,930人となる	
			桜ヶ丘高校出身谷本歩実選手 アテネオリンピック柔道女子63キロ級で優勝	
			豊橋市制100周年（8月1日）	

参 考 文 献

国土交通省交通センサス 国勢調査 渥美郡史 豊橋市史 昭和27年市制要覧 80周年記念 豊橋市の歴史 豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告5 岩屋下古窯 豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告15 白石遺跡 古文書にみる江戸時代の二川宿 市内遺跡詳細分布調査報告書 海道をゆくー渥美半島の考古学ー 道中記にみる吉田二川の名所 東海道の松並木と一里塚 東海道五十三次宿場展Ⅳ とよおか誌 東部校区風土記 調和一飯村土地区画整理事業完工誌ー 飯村履歴調査 飯村誌 豊橋市飯村町史 飯村歴史年表 飯村茶屋のあしあと 田尻村誌 三河の街道と宿場 牟呂史 高師風土記	豊橋市立豊岡中学校 東部中学校 豊橋飯村土地区画整理組合 長坂浅治郎著 村誌編輯 加藤貞一著 永井進著 永井進、大場若芳、山内龍一著 田尻村郷土史研究会	札木町四百年史 郷土しんかわ風土記 東海道二川宿の研究 東海道五十三次を歩く 参河国名所図絵 三河百話 東三河の戦争遺跡 東海道宿村大概帳 濱名の渡しと鎌倉への道 豊橋の町名の変遷 豊橋の民話 愛知県の地名 愛知県の地名 日本地名大辞典 技術の考古学 石巻文化財資料集162号 高師山須恵器窯址の分布 渥美半島植物記 JR東海バス一般路線廃止方針に関する情報 豊橋市寺院誌 郷土豊橋を築いた先覚者たち 東三河の歴史 三河考古 愛知県東部における本土決戦準備 中日東愛知新聞 牛川原人特集 鬼師の世界ー黒地：山本吉兵衛系 (2) 石川華香展図録	紅林太郎著 児玉幸多監修 豊田珍比古著 吉川利明著 加茂豊策著 吉川利明著 豊橋民話を語りつぐ会 平凡社 角川書店 潮見浩著 恒川敏雄著 東三高校日本史研究会 愛知大学国際コミュニケーション学会
--	--	--	---

編 集 後 記

温故知新 古くからの言葉ですが校区史編集を終えたいま、しみじみと感じております。

豊橋市制100周年の記念行事として飯村校区史の編集が企画され、準備委員会を平成16年9月28日に、そして別掲の委員を選出し第一回の編集委員会を平成17年5月14日に開催いたしました。以来15回の編集会議により修正をかさねてまいりましたが、内容につきましては縄文以後の郷土の歴史を、特に市制後の100年間の動きについて小学生にもわかりやすいように記述いたしました。先覚者の努力をかみしめ将来への指針となることを願うものであります。

編集にあたり市役所、東部中学校、飯村小学校及び郷土史家、有識者の方々から資料のご提供など格別のご後援をいただきありがとうございました。

さらに編集全般にわたって情熱をかたむけていただいた小久保先生、鈴木先生、瀧崎先生、山内龍一氏、サポーター諸賢を始め関係各位には心より感謝を申し上げる次第であります。

こうした多くのご協力をいただきながらも不備な点があることと存じます。後日のご指摘、ご教示をお願いするものであります。

平成18年6月 校区総代会一同

飯村校区史編集実行委員

浅田 高善	伊藤 信一	伊藤 篤示	植村 幸司	太田 昭三	大矢 重弘
小澤 直哉	小澤 英彦	加藤 清恵	熊沢 匡哲	倉本 盈夫	小久保敏夫
佐藤 重昭	白井 敏晴	鈴木 正平	瀧崎 吉伸	仲田 泰夫	日野 義久
星野 憲一	山内 龍一				(敬称略・五十音順)

校区のあゆみ 飯村

平成18年12月25日発行
編 集 飯村校区総代会
飯村校区史編集委員会
発 行 豊橋市総代会
印 刷 株式会社 きょうせい



古紙配合率100%再生紙を使用しています



Trademark of American Soybean Association

